

# 社会主義および共産主義社会における 自由実現の可能性について

羽 島 不 二 夫

信州大学繊維学部哲学教室  
(1961年9月30日受理)

## 目 次

緒 論	2
I Hans Boeck の倫理説	3
1 倫理学の方法	3
2 道徳的訓戒の実践の社会的条件	4
3 社会主義的道徳意識の内容	5
4 社会主義道徳の根本原理	6
5 覚え書き	7
II マルクスとエンゲルスの倫理観	8
1 道徳の歴史的相対性の逆説的意義	8
2 道徳的实践における唯物弁証法の逆説的意義	10
3 共産主義社会の道徳的状况	11
4 覚え書き	12
III 社会主義社会における自由の問題	14
1 一つのエピソード	14
2 その示唆するもの	19
3 独裁と断絶	23
IV 唯物弁証法の問題点	24
1 問題探求の足場	24
2 エンゲルスの弁証法	26
〔1〕 素朴な疑問	26
〔2〕 発展過程の特殊性は問題にしないのか、するのか	30
〔3〕 エンゲルスとヘーゲルの近似性	32
〔4〕 個々の事物の発展＝運動は弁証法の諸法則のすべてを具備しているのか	32
3 毛沢東の弁証法	34
〔1〕 矛盾の普遍性と相対性	34
〔2〕 実践と認識との相互滲透	37
〔3〕 矛盾と矛盾との相互転換	38
〔4〕 説得の弁証法	40
〔5〕 覚え書き	41
4 諸家の弁証法の特徴について	42

〔1〕 レーニンの弁証法.....	42
〔2〕 スターリンの弁証法.....	44
〔3〕 マルクスの弁証法.....	45
〔4〕 要 約.....	46
5 断絶観を支えるもの.....	46
V 結 論.....	49
VI 註.....	53
VII Einleitung und Hauptinhalt .....	57

## 緒 論

この題目を私は倫理学の問題として取り扱うことにする。通常この種の問題は、倫理的諸問題に関する一般的な原理の確立を主要な任務とする倫理学の領域外にある。ここで一般的原理とは、行為に関する評価、倫理的価値や概念の意味、道德法則や規範の構造、倫理的価値の実現の方法に関する原則——これらのものに関する普遍的な理論を指す。掲げられた題目の下にいま私の究めようとすることは、カール・マルクスとフリードリッヒ・エンゲルスおよびその後継者たちによつて提唱された新しい倫理秩序とその実現方法の妥当性を即物的に批判するにある。従つてそれは本来的な倫理学の対象であるとは言えない。それにもかかわらず私は、マルクス主義の倫理説に関する限り、この問題を倫理学の対象として取りあつかうことが許されたと信ずる。その理由は下記の通りである。

マルクス主義の倫理学は、道德発展の理論を唯一の例外として、倫理学の原理の問題をほとんど取り扱わない。マルクス主義者はしばしば正義や義務、名誉の如き倫理的諸概念とか道德法則や道德的訓戒や人格の尊厳等について語る。然し彼等はこれらの諸概念の意味や用法は在来の倫理学の立場を踏襲している。むしろ、こうした形式的な面は全く彼等の関心の外にあるマルクス主義倫理学の間うところは、専らこれらのものの実践または実現のための客観的条件に限られる。わけてもその根本特徴は、人類の理想であり、また道德の根本条件でもある自由と主体性の、人類規模における確立のためのプランを、社会的条件との連関において提出し、かつその実行のために取らるべき実践手段を具体的に描き出していることである。随つて、マルクス主義の倫理学を問題とする限り、その提唱するプランの成否の問題、すなわち自由実現の可能性の問題を問わざるを得ない。

マルクスおよびその後継者たちが、新しい社会における道德的情况を描き出す場合に用いる常套手段は、資本主義社会のそれを引き合いに出して、これと対比的に前者を特徴づけることである。二つの社会の道德は氷炭相容れざる対極として描かれる。もちろん、前者を万人の自由と主体性を保証するヒューマニズムの道德として、後者を人間性を抹殺する隷従的道德として。前者を無限の展望を有する未来の道德として、後者を廃れ亡びいく過去の道德として。

このように、二つの社会における道德的情况を「正」と「反」の対立においてとらえる「断絶観」の根柢には、言うまでもなく弁証法が控えているわけである。従つて、社会主義社会の道德の核心、すなわち自由の実現を考察するには弁証法の批判的考察にまでおよばざるを得ない。

小論において私は、現代のマルクス主義倫理学の一つの見本として Hans Boeck の「マル

クス主義倫理学と社会主義道徳」をとりあげて、マルクス主義倫理学の一般的傾向を概観し、次にマルクスとエンゲルスの倫理観を略述して、その根柢に「断絶観」の存することを論じ、第三に弁証法の問題点を明らかにし、第四にこの問題点に関連する「断絶観」を批判的に考察し、最後に「可能性」の問題を「断絶観」との関連において考察することにする。

## I Hans Boeck の倫理説

本論文に直接に関係のある部分を上掲の書から抽出すれば、これを次の三方面に分つことが出来る。(1) 倫理学の方法 (2) 社会主義道徳意識の内容——義務、名誉、良心、幸福 (3) 社会主義道徳の根本原理。

### 1 倫理学の方法

倫理学研究の問題は種々の道徳観の根元を、それぞれの社会諸関係から、そしてまた道徳観の社会的役割とその現実から、言いかえれば、道徳の階級的性格から明らかにし、そして如何なる規範が社会の発展方向に即応し、かつ良く正しくあるかを見出すことにある。こうした研究が、与えられた社会諸関係において何が道徳的であるかを知らせる唯一の科学的な道なのである。

ところで、ここで社会諸関係とは歴史的発展の産物である。従つて倫理学は先ず、道徳とかかる歴史的な社会諸関係とのかかわりを明らかにしなければならぬ。それを為すのが倫理学の方法である。

道徳理論としての倫理学は、与えられた歴史的時代において、如何にして人は正しく良く行為しなければならぬかを明らかにしなければならない。総じて倫理学は歴史的発展の合法則性から出発しなければならない。歴史的必然性の認識によつてのみ、われわれは自由にかつ自覚的に社会諸関係を打ち立てることが出来るのである。あたかも、自然法則の認識によつて自然支配を拡張し、自然過程を生産目的のために利用し得るように、社会の発展法則の認識によつてのみわれわれは何が歴史的に必然であるか、如何に歴史は発展するか、従つてまた、新しい生活のために如何に行動すべきかを、科学的な確実性を以つて決定することが出来る。(1)

かくて Boeck は社会発展の各段階とそれぞれの段階における道徳との相関関係を跡づける。

原始社会においては、道徳は生産手段の根元的共有という生産関係によつて規定されていた。この根元的共有に基づいて一定の慣習、習俗、道徳規則などが幾百年幾千年のしきたりによつて作られ、聖化された。生産手段の共有と生産力の未発達が集団の共通な生活と労働とを制約した。すべての人が平等であつたし、またそれにふさわしく行動した。個人を肉体的に鍛えあげることと集団の中に組み入れること——それが、社会がその成人に課した主要要求であつた。

経済的基底の変化とともに、すなわち生産手段の私有の成立とともに、そしてまた奴隷制の成立とともに、道徳は変化を来した。階級社会の成立は道徳を後退させたとも言える。私有財産の成立すなわち新しい生産関係の出現は、貪慾、個人主義、阿諛などの「道徳的特質」をうみ出した。フリードリッヒ・エンゲルスは書いている。「新しい、文明化された階級社会のもたらしたものは、最低級の関心——人人の間に共通の、貧欲、野鄙な享楽欲、不潔な物欲、私欲による共有財の強奪である。古い無階級の「毛並のよい社会」を掘りくずして崩壊させたものは竊盗、暴行、裏切り、謀反などの恥ずべき手段である。

原始社会の道徳は地を払つた。新しく成立した奴隷所有者の道徳は奴隷制という独特な生産関係にふさわしいものであつた。奴隷所有者の道徳によると、奴隷の搾取は道徳的に正当とされたが、一方、自由民には肉体的労働は、少くとも奴隷制度の開花期と崩壊期には厳禁されていた。

封建時代には二つの基本的な階級が対立していた。封建的支配者と農奴がこれである。両者の道徳はそれぞれの経済的、政治的立場が異ると同様に相異つていた。封建的支配者の見解では、農奴の搾取と自分たちの支配の確保に役立つ一切のことは正義であり、かつ善であつた。一方、圧迫された国民大衆の間には正反対の見解が拮つて行つた。一例を挙げれば、古い農民の歌に、

アダムが耕しエヴァが織つた時  
どこに一体貴族がいたか

とある。これによつて百姓が、彼等の封建的搾取者と全く正反対に考え、かつ感じたことがわかる。

資本主義では労働者とブルジョアジーとの根本的対立が、この二つの階級の道徳的要求の対立を制約する。ブルジョアジーは可及的に高い利潤をひき出し、かつあらゆる手段を以つて自分たちの階級を防衛しようとする。これに反して、労働者階級は搾取と資本による圧迫に対して戦い、搾取社会を絶滅し、搾取と圧迫から自由な、社会主義的——共産主義的社会を戦いとうと努力する。労働者階級とブルジョアジーの道徳観の対立もまた、両階級の経済的、政治的観点の対立と同様に、和解し難くかつ根本的である。

道徳的要求が社会的存在によつて制約されているとすれば、道徳的要求はこれを社会的存在の発展とその成果によつて研究する以外に道はない。エンゲルスが書いているように、これまで社会は階級対立の中に動いていた。道徳は常に階級道徳である<sup>(2)</sup>。

## 2 道徳的訓戒の実行の社会的条件

ここで道徳的訓戒とは、例えば「殺す勿れ」「盗む勿れ」のような形で与えられる禁止、命令を指す。Boeck は下記のように、これらの訓戒が行為によつて実現されるかどうかは専ら社会的条件にかかっているとす。

### 隣人愛の命令

この命令は、一見するとあらゆる社会、あらゆる階級に妥当するよう見えるが、その実行如何は全く社会的条件にかかっている。中世時代には教会そのものがこれを破つた。教会は十字軍やその他の戦いを祝福したし、また宗教裁判において、異端審問や邪教迫害において、幾百万の人間を死へ追いこんだ。今日でも西独の教会はアデナウアー政府の戦争政策を支持している。

### 殺す勿れ

殺す勿れの要請は隣人愛の命令と直接に関連しているのであるが、これまた具体的な歴史的條件によつて多かれ少かれ制約されている。

奴隷保有者は、社会のとがめを受けることなく、自分の奴隷を殺すことが出来たし、過労によつて身を滅ぼさせることも出来た。また体刑によつて傷つけることも出来た。封建社会では地主は自分の農奴を意のままに殺す権利こそ持たなかつたが、しかもそういうことの起きる可能性はあつた。資本主義社会は、一見すると文明化されているよう見える。そこでは「社会的殺人」は文明的な方法でなされる。何人も個人としては殺人の権利を持たない。だが資本主

義は利潤の最大限を引き出すために幾百万の人間を戦争に追いこむ。幾百万の人間を飢餓に追いこむ。これを社会的殺人と呼ぼずして何と呼ぶか。以上の事実は、階級社会においては「殺す勿れ」の命令が如何に非現実的であるかを物語っている。帝国主義的なプルジョージは、帝国主義者の利益とあれば、どんな殺人でも是認するのだ。

搾取階級の道徳にとつて典型的なものは阿諛である。阿諛は個人個人の悪意に根ざすものではなく、搾取社会の組織の中にその根を持つていのである。そして、社会秩序の矛盾が深まれば深まるほど、いよいよその度合いはひどくなる。搾取階級の道徳は二重道徳である。公の面前では、外見上普遍的に承認された道徳がショーに供せられる。だが裏ではどさくさの中で物をあさる。

さて、以上述べた搾取社会の事情を裏返しにしたものが社会主義社会の実情なのである。ここでは人人を二重人格たらしめる何の根拠もない。殺す勿れの訓戒の実現をはばむ如何なる客観的事情もない。それは額面通り実現される。

盗む勿れ

この要求、つまりむさぼりを罪なりとする考えかたは社会主義においてもあるのではないかと言う人があるかも知れぬ。が、事実はこちらだ。この命令は社会主義社会では全く特殊な意味を持つていのである。というのは、それは社会的な財産と労働者の個人的な財産の擁護に向けられているのである。しかし、この段階では資本主義社会の残滓が全く消え失せていとは言えないから、ともかくある意味を持つていことは事実である。ところが共産主義になると事情が違ってくる。ここでは盗みのための一切の動機が消滅している。何故ならば、この社会ではすべての人が彼等の要求にしたがつて社会的富から分配を受けるから、盗む勿れという禁止は、自らが身を傷つけたり毒したりするなという禁止と同様に無意味だからである<sup>(9)</sup>。

### 3 社会主義的道徳意識の内容——義務、名誉、良心、幸福

道徳ないし道徳意識を規定する範疇として、一般に義務、名誉、良心、幸福などの根本範疇が使用される点では、どのような倫理学でも変りはない。社会主義倫理学でも、道徳意識の根本特徴を示すのにこれらの概念を使用する。だが、われわれの関心事は、これらの範疇の形式的な側面を観察することにあるのではなく、範疇の社会主義的な内容を描き出すことにある。義務の具体的歴史的内容は何か。良心の規準はどこに存するか。如何なる行動が名誉に富みかつわれわれを幸福にするか。それが社会主義倫理学の研究課題なのである。

マルクス主義の倫理学は人間の人格性の中に存する義務意識や良心の存在を否定するものではない。だが、歴史に現われた社会生活の実情に照らしてみると、義務や良心の内容があらゆる時代を通じて同一であり、社会発展の具体的な要求から独立であるという見解は否定せざるを得ない。義務や良心の根源は「神」の如き超社会的な、単に頭の中に構想されたものにあるのではない。道徳の理念や理性の中にあるのでもない。人間の性情の中にあるのでもない。それは実に社会発展の客観的要求の中に、結局は普遍的な歴史的必然性の中にあるのだ。

義務

歴史上に現われた社会は、原始社会と社会主義社会を除いては、何れも階級社会である。階級社会における道徳的義務はそれぞれの階級の意志の表現なのである。このような階級社会にあつては、一つの階級の利害と他の階級の利害とは必ず対立するのであるから、道徳的義務も相対立するものとして現われる。随つて問題はこうなる。すなわち、対立する階級の何れが歴史的必然性に即応して行動するかということになる。普遍的な歴史的必然性は、相異なる階級

の道徳的な義務の表象の間から正当な決定をくださすための、唯一にしてしかも十分な規準なのだ。ただ次のような行為のみが道徳的に善であり 正当であり、それ故に義務である。すなわち、人間性の進歩と発展に奉仕する如き行為のみが。階級社会の歴史的事実から言えば、歴史的進歩のために、働く人間の解放のために戦った、あるいは戦いつつある階級が高く正しい道徳をもたらした、道徳的進歩の前衛となるのだ。

#### 名誉

名誉の概念は義務の概念と密接につながっている。それぞれの階級において義務観が異ると同様に、われわれが名誉となすものの内容も階級ごとに異なる。貴族社会にあつては、名誉はまさにその生いたちそのものであつたし、また所得上の特権でもあつた。ブルジョアの名誉は銀行取引の大きさによつて計られた。社会主義社会の名誉は労働者階級に対する義務の遂行に基づいている。間違いなく言えることは、名誉は義務の遂行ということから起るところの公的認証であり、自尊である。名誉の概念には三つの契機が含まれている。(1) 社会的義務の遂行。(2) 社会的な認証。(3) 人格尊厳の意識。この中の(3)は(1)と(2)から来るものである。

以上のことからわかるように、道徳観が移るにつれて、名誉の観念、感情および人格尊厳の観念も変化する。名誉の観念と名誉感とは常に社会的な利益と社会的義務への奉仕によつて制約される。このことは人格の尊厳を家系や所得によつて計る搾取階級の名誉観と比較して全く新規なものである。

#### 幸福

社会主義的な道徳意識の一面としての幸福は、社会主義的な義務を良心的に充足したことから起るところの道徳的な満足感であり、また社会主義的な道徳の要請に即して生きようとする意識である。己が全精力を社会主義のために投入したという意識、社会主義の勝利に寄与したという意識、社会主義国家の平和政策の推進に挺身しているという意識……。

搾取社会においては、一人の幸福は他人の不幸の上に成立する。ブルジョアのいかがわしい幸福は、つまるところは資本主義的な特権の中に、搾取の中に、無産大衆の不幸の中に、可及的最大の利潤率の中に成立する。人格性ということに即して言うならば、旧い型の幸福は「社会生活から完全に離脱すること」なのである。それは狭い個人的な小宇宙に——これは人間不平等の結果として、低い地位におかれた人人の嫉妬をかきたてるものなのだが、こうした小宇宙にたてこもることなのだ<sup>(4)</sup>。

#### 良心

(叙述を省略する)

### 4 社会主義道徳の根本原理

#### (1) 集団主義の原理

集団主義の原理 *das Prinzip des Kollektivismus* は社会主義的共同社会や労働する民族の社会における思考や行為の根本原理をなす。それは市民道徳の根本原理たる個人主義の対極をなす。レーニンは言う。「古い社会は次の原理に立っている。君が他人を奪いつくすか、さもなければ、他人が君を奪いつくす。君が他人のために働くか、さもなければ、他人が君のために働く。君が奴隷所有者であるか、さもなければ、君が奴隷である。このような社会に育つた人間は、言わば母乳と一緒に次のような考え方、しきたりを吸いとるのだ。すなわち、奴隷所有者かさもなければ奴隷、または小額所得者、雇傭人、下級官吏、知識人——一口に言つて自分のことだけにあくせくする人間、他人とかかわりのない人間となるための養分を。」

社会主義社会の人間の心情はこれとは根本的に異なる。社会主義者は自己の生命を、その力を社会主義のことに捧げる人間である。働く人間の解放と福祉のための戦いに自己の幸福を見出す人間である。

#### (2) 社会主義道徳の根本原理としての社会主義的ヒューマニズム

社会主義的ヒューマニズムは、社会主義と共産主義の建設が世界史的な意義を持つているという事実の意識的な表現である。この建設を通して、史上はじめて人間は自己の社会的存在の諸条件を超えて、主人となる。この建設によつてはじめて人間は、社会発展の法則に従つて、自己の存在の諸条件を意識的に、自由に形成することが出来るのだ。社会主義的ヒューマニズムは、働く大衆が自らを低いじめな奴隷性から、人間の人間による搾取から解放し、自由な人格性を発展させ、かつまた人間の幸福のために一切の彼等の能力を発展させるという事実の意識的表現なのである。

#### (3) 愛国心

愛国心は単に郷土の自然に対する愛の中に存するのではない。単に他国と違う自国の特殊性への愛の中に存するのでもない。単に母国語への愛、伝統や民族文化、歴史への愛に存するのでもない。これら一切は愛国心の多少とも重要な要素であるには相違ない。だが、若し人が愛国心をこれらの要素の一つまたは全部に還元しようとするならば、必ず彼は感傷的な俗物に堕してしまうのだ。新しい愛国心の決定的な要素は、社会主義の国家秩序および社会秩序が資本主義のそれに対して優つているという意識であり、具体的に言えば、ドイツ社会主義共和国の労働者の業績に対する誇りであり、社会主義の敵に対する憎しみである。愛国心の核心は、ドイツ社会主義共和国において、ドイツ史上はじめて労働者階級が働く農民と結合して権力を握つたという事実の確認なのである。

#### (4) 労働の社会主義的調整

社会主義的労働道徳は、資本主義的搾取から解放された労働は社会主義社会の富の直接の源泉をなすが故に、新しい社会主義道徳の最重要な側面をなす。のみならず、社会主義的労働は次のような高い道徳的個性の源泉をなす。すなわち、労働者集団ならびに社会に対する責任意識、連帯と相互扶助、堅忍不拔と首尾一貫、種々の困難に立ち向う敢為性と力量、豪胆と勇気謙譲と自己意識、男性と女性とが相互尊重の基礎の上に同志的關係を保つことなどの……。労働の社会主義的調整は社会主義を打ち立てる諸民族の生活において、或る「根本的に新しいもの」である。ブルジョアジーの思想家や教師たちは国民に対して「乞え、そして働け」と説教する。だが資本主義の下では、労働はプロレタリアートにとつて意味のないもの、生きるために従事する必要悪なのである。彼等は労働の中に何の喜びも、満足感も見出すことが出来ぬ<sup>9)</sup>。

### 5 覚え書き

社会発展の各段階に応じて道徳は進歩する。然し人間の柄はそれに正比例して悪くなる。そして柄の悪さは資本主義に至つて頂点に達する——そういう口吻が、否、そういう事実を論証しようとする試みが Boeck の文章のいたるところに見える。

この邪悪の絶頂の対極としての善美の絶頂が社会主義社会（厳密には共産主義社会）の道徳の姿なのである。前者から後者への道には、飛躍によらずしては到達出来ない断層がある。

Boeck の描き出している社会主義社会の道徳的情况がどれ程現実性を持つているか、どれ程の実証性を持つているかは彼の著者に関する限りでは明らかでない。しかし、共産主義社会の道徳的情况にいたつては文字の域を出ていないことはたしかである。

## II マルクス・エンゲルスの倫理観

マルクスとエンゲルスの全著作を通じて、多少とも体系的に道德問題を取りあつかつたものは、エンゲルスの「反デューリング論」の第1篇第8章から第11章にわたる部分のみである。しかし、経済理論家にして、この二人ほど深く倫理問題に触れている人は恐らく他に絶無であろう。先ず虐待された労働者に対する深い同情と経済制度から来る不正に対するはげしい憤りが彼等の全生涯の行動を規定したことは、彼等の文筆と実践活動の片鱗を見ただけでも明らかである。もちろん、経済をはじめとするその社会理論は客観的、没価値的立場から組み立てられている。しかし、これらの理論を、仮りに実践とのかかわりを絶つて理解しようとするならば、二人の意図したところから全くとおのいたことになる。「今の状態を止揚する現実的な活動が共産主義である。」<sup>(1)</sup> この一言はマルクスの理論の実践的性格を示唆するに十分である。マルクスの理論はただ共産主義の一点を指向し、これを基礎づけるためのものとなつてゐる。それのみではない。マルクスによれば、実践において人間は真理を、すなわち自己の思惟の現実的な力を、その此岸性を証明せねばならぬのである。<sup>(2)</sup> 実さいマルクスとエンゲルスの意図したところは、全人類的な倫理的秩序の建設にあつた。客観的・科学的と言われる彼等の理論体系も、この大業に奉仕してはじめて、その意義を完うするのである。倫理の問題はマルクス・エンゲルスの出発であり、帰結であつた。

マルクスとエンゲルスの諸著作に現われた道德関係の事項を次の4つの方面に分かつことが出来る。

- (1) 道德の解釈に関する方面。(2) 社会主義(共産主義)社会の道德的情况に関する方面。
- (3) 道德的实践に関する方面。(4) 彼等自身の道德的信念に関する方面。

本章で取扱うのは(1)から(3)までである。

### 1 道德の歴史的相対性とその逆説的意義

道德の解釈に直接に根拠を与えるものは唯物史観である。唯物史観によれば、道德、宗教、その他のイデオロギー、さらには社会的、政治的、精神的生活過程一般は社会の経済構造によつて条件づけられる。この経済構造は総体的な生産関係を指すのであるが、このものは社会の物質的生产力の一定の発達段階に相応するものなのである。<sup>(3)</sup> ところで、歴史の進展とともに生産力は発展するのであるから、それと平行して生産関係——経済構造も推移し発展することになる。随つてこれを基底とするイデオロギー一般、ひいては道德も変遷し推移するわけである。「道德、宗教、形而上学並びにそれらに対応する諸々の意識形態は、もはや独立性の外観を保持しない。これらのものは独自の歴史性を持たない。」<sup>(4)</sup> 結局「道德はそのときどきの経済的、社会的状態の所産である。道德は独立の歴史性は持たないが、経済的諸関係とともに変遷する。この意味では道德は、従属的ではあるが、どこまでも歴史性を持つということになる。道德の歴史的相対性とはこのことを指す。

ところでマルクスによれば、一定社会における道德は常に支配階級もしくは支配的地位を奪取しようとする階級の道德である。言いかえれば、あらゆる時代の道德的信念の核心をなすものは、社会における支配的地位を奪取しようとし、または保持しようとする諸集団の利益や要求である。かくて、道德的諸観念は、階級闘争のための道具である。満足のいく地位の獲得をめざして闘争する諸階級は、彼等の物質的要求に一致するような道德的諸観念を発展させる。同様に、支配階級はその諸要求に一致した、言葉のうえだけの普遍的な道德的諸観念を擁



護する。何故ならば「自分たちより以前に支配していた階級に代つて現われるいずれの新しい階級も、自己の目的を貫徹するために、自己の利害を社会の全成員の利害として叙述するように、即ち、自己の思想に普遍性を与え、それを唯一の合理的な普遍妥当な思想として叙述するように余儀なくされる」からである<sup>(5)</sup>。

道徳の階級性はこのように歴然たるものであるが、それは一概に盲目的な階級性、党派性として退けられているわけではない。支配階級の交代は、同時に道徳の規律的な発展を意味する。上述の引用文に引き続いて、マルクスは次のように書いている。「革命的階級は、それがひとつの階級と対立するという理由から、すでに階級としてでなく、かえつて全社会の代表者として登場する。それはただ一つである階級に対して社会の全大衆として出現する。このことが可能であるのは、当初にはこの革命的階級の利害が、現実になおより多く爾余のすべての非支配階級の共同の利害と関連しており、従来の諸関係の圧迫のもとになおいまだ一つの特権階級の利害として発展し得なかつたからである。それだから、この階級の勝利は爾余の、支配的地位に上つて来ない諸階級の多数の個人にとつてもまた利益になる。けれどもそれはただ、この勝利が今やこれらの個人をば支配階級にまで向上することが出来るようにする限りにおいてである。フランスのブルジョアジーが貴族の支配を顛覆したとき、彼等はこれによつて多くのプロレタリアをして自己をプロレタリア以上に高めることを可能ならしめた。けれどもそれはただ、彼等がブルジョアとなつた限りにおいてであつた。このようにしていずれの新しい階級も、従来支配して来た階級の土台よりもより広い土台の上においてのみその支配を成し遂げる。」<sup>(6)</sup>

ここに「より広い土台の上においてのみその支配を成し遂げる」とは、隷属的でない人間の数の比率が増大することを意味する。社会の発展につれて道徳も規律的に発展するとはこのことを指す。

この意味でまた、資本主義社会の道徳はそれに先行する如何なる社会の道徳よりも広い土台に立ち、従つてより高い段階にあると見なければならぬ。

然らば資本主義社会の道徳的情况は樂觀を許すようなものであろうか。もちろん、そうではない。

上掲の引用文に続いて、マルクスは次のように書いている。「その代りにその後には、今度支配する階級に対する非支配階級の対立もまたそれだけいよいよ尖鋭にかつ深刻に発展するのである。この二つの事柄によつて、この新しい支配階級に対して行われる闘争は、これもまた従来のすべての、支配の獲得に努力した階級がこれをなし得たよりも一層決定的に、一層根本的に、従来の社会状態の否定のために努力する、ということが約束されている。」その理由は「現代、すなわちブルジョアジーの時代の特徴は、階級対立を単純化したという点にある。全社会はますます敵対する二大陣営に、互いに直接対立する二大階級に、すなわちブルジョアジーとプロレタリアートに分裂しつつあるからである。」<sup>(7)</sup> しかも、資本主義は、その必然的法則に随つて独占化の傾向をたどり、「困窮、圧制、隷属、墮落、搾取の度合いをいよいよ増大する。」<sup>(8)</sup> 資本主義社会はまた商品社会である。「ブルジョアジーは人格価値を変じて交換価値となし、成文によつてかつ正当に認められた無数の自由の代りに不条理な取引の自由を設定した。それを一口で言えば、ブルジョアジーは、宗教的、政治的錯覚で偽装された搾取に代えるのに、大げな、破廉恥な、直接的な露骨な搾取を以つてしたのである。」<sup>(9)</sup> 要するにブルジョア社会は人間から人格をはぎとる社会である。そこでは、「資本が独立的で人格を持つて

いるのに、生きている個人は奴隷的で人格を持つていない。』<sup>90</sup>

資本主義社会がこのようなものであるとすれば、たしかにその道徳的情况は最低劣としなければならぬだろう。

マルクスの経済理論によれば、資本主義経済は生産力と生産関係との二つの支柱の上に立っているのであるが、両者の間には元来両立し難い矛盾関係が存する。この矛盾は資本主義の発達につれて増大してゆき、独占の段階に至つてその頂点に達する。「資本は、そのもとで開花した生産様式の極端となる。』<sup>91</sup> 同時に、「資本の圧制の度合が増大するについて、被抑圧者の反抗の度合も増大し、たえず膨張し、かつ資本主義そのものの機構によつて訓練され、結合されることになる。生産諸手段の集中と労働の社会化とは、それらの資本主義的外皮とは両立しない点に到達する。その外皮は破裂する。資本主義的私的所有の吊鐘が鳴る。収奪者たちが収奪される。』<sup>92</sup>

さて、プロレタリアートの運動を単なる階級的利害のための運動と解する限りでは、未だそれは倫理的意義を持つものとは言えぬだろう。然し、マルクスによれば、プロレタリアートは最大多数者の階級であつて、その諸要求は最大多数者の要求を現わしている。しかも、彼等は何人をも収奪せず、何人からも収奪されない。この理由から、プロレタリアートの諸理念は他の階級のそれに絶対に見られない究極性を持つている。道徳観念また然り。

プロレタリアートの勝利によつて階級なき社会が出現したとき、道徳はその相対性を止揚して究極的のものとなるのである。してみると、道徳の歴史的相対性はこの究極性への歩みの道程に過ぎない。そればかりではない。マルクス・エンゲルスの理論における相対性の強調は、実は絶対性への跳躍の踏台をなしている。彼等は階級道徳の相対性と党派性を論証することによつて、新しい倫理秩序実現への情熱を鼓舞しようとする。彼等は既存の道徳をことごとく斥ける。もちろん、それは道徳そのものの否定を意図したものではない。却つて既存の道徳の否定は、来たるべき社会の道徳の究極性をいやが上にも強く印象づけるものとなつてい

る。ここに道徳の歴史的相対主義の逆説的意義がある。

## 2 道徳の実践における唯物弁証法の逆説的意義

道徳が客観的な経済法則に従属することは、道徳そのものが必然法則に従うことを意味する。然らば人は与えられた道徳法則に従う外ないのではなからうか。そういうことにはならぬ。必然性はこれを認識することによつて克服される。エンゲルス曰く。「自由は、自然法則からの独立を夢みることのうちにあるのではなく、この法則の認識のうちに、またその認識のうちに与えられた可能性、すなわちこの法則を一定の目的に対して計画させる可能性のうちにある。このことは外的自然の法則についても、人間そのものの肉体的、精神的存在を規制する法則についてもあてはまる。……だからある人の判断がより自由であればあるほど、この判断の内容はそれだけ大きな必然性を以つて規定されていることになる。したがつて、自由とは自然の認識にもとづいて、われわれ自身ならびに外的自然を支配することである。』<sup>93</sup>

マルクスとエンゲルスの立場に立つて言えば、プロレタリアートによる一切の実践活動は最高の道徳的意義を持つことになる。何故ならば、それは絶対多数者のためのゆるぎない道徳の確立に連なるからである。そして、かかる実践はプロレタリアートの自意識的な、自由な運動でなければならぬ。ここに自意識的とは、自己の立場を客観的な社会的条件との連関において認識することである。客観的な社会的条件は歴史的必然である。この必然性を認識し、これを一定の目的のために自覚的に破壊すること、これがプロレタリアートの実践の内容をなす。マ

ルクスとエンゲルスの全理論はこの必然性を明らかにするにある。このように見てくると、マルクス・エンゲルスの全理論体系が、究極的には道徳的实践のプランをなしているとも見られる。例えば「資本論」は資本のからくりとその運動法則を明らかにし、資本制経済のたどる結末を描いている。それは必然的な法則として叙述されているのであるが、この必然的法則の認識をまたないでは、プロレタリアートの自覚的な実践活動はあり得ない。それは理論と実践との統一を意味する。むしろ理論は実践のための手段をなしている。

次にマルクスによれば、経済の運動法則は唯物弁証法の法則に従う。してみれば、道徳の変遷も間接には弁証法的法則のらち外にあるものではない。唯物論はそれ自体では人間疎外の理論である。それにもかかわらず、それは人間の主体性の確立のための不可欠の前提をなしている。

その理由は次の通りである。資本主義経済の運動法則の科学性を保証するものは唯物弁証法である。別の表現をすれば、資本主義は弁証法的に運動することによって、一定の必然的過程をたどる。その故にこそ、また、その認識には厳格な客観性がある。随つてまた、かかる認識にもとづく実践も普遍的な妥当性を持つことになる。前に述べたように、人は必然性を認識し、これを支配することによつて自由を獲得するのである。してみれば、かかる自由を成立させるものは、結局において唯物弁証法ということになる。唯物弁証法は自由への発条をなす。唯物弁証法は唯物論たる限りでは自由否定の理論でなければならぬ。自由の否定者たるべきものが自由を保証するものとなる。ここに唯物弁証法の逆説的意義がある。

### 3 共産主義社会の道徳的情况

社会主義の奥の院とも言うべき共産主義社会の道徳的情况如何。

エンゲルス曰く。「動産の私有が行われたときから、このような私有の行われるすべての社会では、盗む勿れという道徳的命令が共通でなければならなかつた。ところがこの命令は永遠の道徳であろうか。決してそうではない。盗みへの動機がとり去られる社会、すなわち、ずつと将来にわたつて、もはやせいぜい精神病者ででもなければ盗みをはたらくものは居なくなるような社会では、盗む勿れという「永遠の真理」をもつたいぶつて布告しようとする道徳の説教屋はどんなに嘲笑されることだろう！」<sup>14</sup> これは道徳の歴史的相対性を述べた文章であるが、ここに、盗みということを題材にして、共産主義社会すなわち要求に随つて与えられる社会の道徳的情况の一端が示されている。一端ではあるが全貌を推すに十分。盗みを語るものが嘲笑されるような社会であつてみれば、もちろん詐欺も横領もあり得ないし、所得に関する限り嘘を言う必要もないはずだ。だから正直について語ることはほとんど意味もなさず、不正がないから正義を説くことは間の抜けたものになる。それは恐らく、悪という悪が全く色褪せて、何人の興味をもひかなくなる社会であろう。

「階級対立を超え、階級対立の思い出もなくなつてしまう真に人間的な道徳が可能になるのは、階級対立をたんに克服するだけでなく、さらに生活実践の上でもこれを忘れ去つている社会段階になつてからのことである。」<sup>15</sup> ここに真の人間的道徳とは完全な自由を意味する。この文章は共産党宣言の中の次の文章に相当する。「階級があり、従つて階級的対立を伴う古いブルジョア社会のかわりに、一つのアソシエーションがあらわれる。そしてそこでは、各人の自由な発展が、万人の自由な発展のための条件となるであろう。」<sup>16</sup> 来るべき新しい社会——そこにはもはや本質的な矛盾や対立はあり得ない。随つてそこに現われる道徳はそれにふさわしく永遠性のあるものとなる。曰く「……それではどれが真の道徳であろうか？ 絶対的な究極的

な妥当性を持つという意味では、どれ一つそういうものはない。しかし、現在において現在を代表する道徳、将来を代表する道徳すなわちプロレタリア道徳が永続性を約束する要素を最も多く持っていることは確かであろう。」<sup>107</sup>

#### 4 覚え書き

マルクスとエンゲルスの道徳観には幾多の勝れた洞察があるが、これを次の2つにしばることが出来る。

(1) マルクスとエンゲルスは、或る人の指摘しているように、人種、階級、国家、信条、その他の地理的、社会的条件を超えて、全人類を一丸とする新しい倫理的秩序の建設をめざしている。<sup>108</sup>そしてそれは資本主義社会を支配する倫理的アナキーに対する厳しい抗議でもある。かかる包括的な世界秩序の理念は、その理論的な基礎づけ方の当否を暫く別にすれば、まさに現代倫理の中心課題の一つでなければならぬ。また働く大多数者が隷従から脱し、自由と主体性とを獲得しなければならぬという主張には、原理的に見て一点の疑義をさしはさむ余地もない。実さいこの主張の持つ啓蒙的意義ははかり知れないのであつて、如何なる現状維持論者も、少くとも原理的にはこれを否定することは出来ぬであろう。

(2) 人類の理想であり、また道徳の根本条件でもある自由と主体性の完全な確立の方法を、客観的な社会的条件との連関において提出し、かつ問題の解決を歴史的実践との連関においてはかろうとする企ても見事なものである。マルクスとエンゲルスは、如何なる道徳的訓戒も倫理的概念も、その実践のための諸条件を離れては、全くの空念仏に終つてしまう事実を明らかにしようとしている。このことは、それらの訓戒や概念が生きてはたらくには、先ずそのための社会的条件を整えよという主張の前提をなすものである。この主張を原理的に反駁する理論を提出することは、恐らく何人にも至難であろうと思う。

然し、マルクスとエンゲルスの理論にも問題がないわけではない。ここでは二つだけ挙げる。

##### (1) 分業なき社会の情況について

マルクスの経済理論によれば、共産主義社会においては、生産力と生産関係との間に何の矛盾もないから無限の生産力が保証される。それは「凡ての人が必要に応じて与えられる社会である。」<sup>109</sup> またそれは分業なき自由の世界であるから、「そこでは各人は専門的な活動の範囲というものを持たず、かえつてあらゆる任意の部門において修業することが出来、社会が全般の生産を規制するのであるから、まさにそのために私は、かつて狩猟者や漁撈者、または牧者または批判者となることなしに、私の気の向くままに、今日はこれをし、明日はあれをし、朝には狩し、夕には家畜を飼い、また食料を批判することが出来る」のである<sup>110</sup>。

さて問題は分業の存否如何である。共産主義社会が仮りに要求にしたがつて与えられる社会であつても、差し当つて人や物資の運搬の労役は入用であろう。とすると運搬に必要な技術の習得を必要とすると見なければならぬ。仮りにそれが航空機の操縦であるとする。われわれは専門職というものを持たず、朝に狩をし夕に釣をするといったようなのらくらな操縦士によつて操られる飛行機に安んじて身を委せることは出来ぬ。操縦士、運転手、機関士、駅長、車掌、線路工夫、巡査、教員、学者、外科医、内科医、大工、農夫、記者、俳優、楽士、歌手……程度の如何を別にすれば、皆それぞれ年季のいる仕事なのである。食事の批判ぐらいならば思いつきでも出来るが、批評家の立場からする文芸や政治の批判となるとそう簡単にはゆかぬ。すべての人が仕事の修得に年季を入れるとは、分業があるという事実を側面から証明するするも

のである。

誰の眼にも明らかなこの事実を何故マルクスとエンゲレスは無視しているのか。その解答は彼等の次の見解のなかにある。エンゲレスによると、分業は自然的無計画的に社会内部に発達し、生産物に商品の形態を与える<sup>93</sup>。次に分業は強制である。「労働が分配され始めるやいなや、各人は、彼に強制せられ、それから抜け出ることの出来ぬ一定の専門的な活動範囲を持つ。彼は狩猟者であるか漁撈者であるか、それとも牧者であるか、それとも批判家であるかであり、そして彼が生活のための手段を失うことを欲しない以上、どこまでもそれでいなければならない。<sup>94</sup> 第三に分業は精神労働と肉体労働、消費と生産という如き対立的な形で現われる。分業の成立とともに、精神的活動と物質的活動とが、享楽と労働とが、それから生産と消費とが相異なる人に帰属するようになる。そしてそのために生産力、社会状態および意識の三つの契機が互いに矛盾におちいる。そしてそれらのものが矛盾におちいらないという可能性はただ分業が再び廃止されるということのうちのみに存する。」<sup>95</sup>最後に、分業は私有財産と不可分のものである。分業は私有財産の別名である。曰く。「同じことが、分業という名においては、活動に関係して言い表わされており、私有財産という名においては、活動の生産物に関して言い表わされているのである。……なお分業によつてもたらされる事態は国家の形成、「幽霊」「紐帯」「より高い本質」「概念」「危惧」など。さらには観念的形成物の発生。これらはいずれも生産の仕方およびそれに従う諸々の桎梏や制限の表現である。」<sup>96</sup>

以上の、分業消滅に関するマルクスとエンゲルス理由は、分業が不都合だということのみであつて、分業消滅に関する積極的な根拠になつていない。この二人にはこうした論法がままある。例えば、資本主義はその所有関係によつて生産力が停滞する。だから所有関係を廃絶すれば生産が無限に高まる、とされる。この「だから」がよく利いていない。

階級社会において、私有財産と分業とが分ち難く結びついていることは事実である。然し、原理的には分業と私有財産とは別であり得る。私有財産が廃止されて共産主義社会が現われるにしても、そこにはそれにふさわしい新しい分業が生ずることは、手当たり次第に、二三の例をあげただけでも肯ける。例えば、財政計画を立案する仕事とこれを実行する仕事との分業。航空機を設計する仕事と製作する仕事と操縦する仕事との分業。家屋一つ建てるにも、最小限度設計士、大工、左官、きこり、水道工夫、電気工夫、材料運搬のトラック運転手が参加する。そして、これらの背後にはこれらの人人に食料、衣料を供給する人、日用品を供給する人、その他無数の業務がひかえているわけである。尤も丸太棒に草の屋根をかけただけの原始共産制時代の家屋ならば話は別。

分業には、諸個人間における相補的、雙務的な一面がある。マルクスはこの初歩的な、それだけに本源的な事実を無視して省みない。

共産主義社会に分業がなくなる根拠は、「社会が生産を規制する」にある<sup>97</sup>。社会が生産を規制するとは如何なる事態を指すか。そもそも、この「社会」は如何なるものであるか。個人が専門的な業務を分担しない社会と言え、それは必要な任務を個人としては何人も引き受けない社会であると解する外ない。このようなものが生産を規制するというのである。ここまで来ると「社会の神秘化」と言う外ない。

分業の廃止との連関において説かれる「自由」にも問題がある。この自由は満ち足りた者の「逃避的自由」である。実践の圏外にある「サロンのまたは牧歌的自由」である。これをマルクスの本来の「自由」——主体的、自意識な活動と並べてみると、両者の間には天と地との

懸隔がある。人は言うかも知れない。これは究極的世界の出来事だと。私は答えて言う。究極は終末に通ずる。克服すべき敵対的矛盾のない世界——レーニンの論法を借れば、そこでは人は退屈し、老衰し、やがて死滅するに相違ないと。

ともあれ理想境ではある。こういう世界が分業社会の陋劣を極めた諸情況との対比において描かれているのだ。ここにわれわれは一つの断絶を認める。

## (2) 社会が生産を規制する

共産主義社会の情況に関するマルクスの「気焰」に深入りし過ぎては、いわゆる教条主義の謗りを受けることになるかも知れない。そこで私は、この社会にも分業はあり、そして毛沢東と共に「階級のない社会では、すべての人が社会の一員としての資格で、社会の他の成員と協力し、一定の生産関係を結び、生産活動にしたがい、そして人類の物質的生活の問題を解決する。」<sup>脚</sup> というふうに理解することにしよう。尤も、毛沢東の言う「階級のない社会」に共産主義社会をも含めてあるかどうかは明らかでないが。(毛沢東、実践論)

それにしても「社会が生産を規制する」の一句だけは不問にするわけにはゆかぬ。断るまでもなく「社会が生産を規制する」は「社会が生産に当る」とは根本的に違う。後者は社会的に結合された諸個人が生産に当ることであり、前者は生産の企画調整を社会が行うことである。

ここで改めて「社会」を追及する必要を認める。

さきに私は、社会が生産を規制するというとき、この「社会」は神秘的なものであると断じた。言うまでもなく神秘主義はおよそマルクス主義とは反対のものである。そこで、社会の神秘性を拒むとすれば、誰かの手を通して生産の規制がなされると考える外ない。エンゲルスによれば、かかる社会では社会関係への国家権力の干渉は漸次不要となり、人に対する支配権は不要となり、代つて物の管理と生産関係の指導が行われる。<sup>脚</sup> 原始共産制の猫の額大の小地域生産ならば知らず、物の管理と生産過程の指導が人の支配を通さずして行われるとなすのは途方もない空想である。国家権力(政治)は階級支配のためのみの道具ではない。仮りに完全な無階級社会になつても政治がなくなるとは考えられない。そもそも政治の世界で「指導」と「支配」との間に、しかも「独裁」との間に一線を劃し難い実例をわれわれは数多く見ている。それのみではない。独裁者は往々にして、社会の名において支配する。社会が生産を規制するとは、特定人が社会の名において人と物とを支配すること以外ではあり得ない。

## III 社会主義社会における自由の問題

### 1 一つのエピソード

1950年のなかば、スターリンは「マルクス主義と言語学の諸問題」という論文を書いた。この論文がソヴェット本国はもちろん、我が国でも大きな反響を喚び起したことは、社会思想に関心を持つほどの人々の間ではまだ記憶に新しいところである。

論文は、スターリンが冒頭で断つてるように、言語学におけるマルクス主義にふれた部分について、新聞紙上で意見を述べるようにとの青年同志のグループからの申し出に応じて書かれたものである。質問は次の四項からなっている。(1) 言語は土台の上に立つ上部構造であるというのは正しいか。(2) 言語はいつでも階級的であつたし、いまもそうであるということは正しいか。また社会にとつて共通かつ単一な、階級的でない、全人民的な言語は存在しないということは正しいか。(3) 言語の特徴はどんなものであるか。(4) 「プラウダ」が言語

学に関する自由討論を開始したのは、正しいやりかたであるか。

尚この論文には、スターリン論文に対する個人的質問に対する彼の答えが「言語学の若干の問題について」としてつけ加えられている。

先ず質問に対するスターリンの回答の結論を述べれば次の通りになる。

言語は土台の上に立つ上部構造ではない。階級的でない所の、全人民的な言語は存在しないという説は誤りである。

この結論に対してスターリンのあげている理由を次の6項目に分つことが出来る。

(1) 例をロシア社会とロシア語にとつてみれば、10月革命を機としてロシアでは資本主義的土台が根絶され、社会主義的土台に照応した上部構造が作り出された。それにもかかわらず、ロシア語は基本的には革命前と同じだった。尤も新しい国家、新しい社会主義的文化、新しい社会生活や道徳の出現にともない、また技術や科学の成長にともなつて、ある程度ロシア語の語彙構成が変化した。しかしロシア語の基礎をなすその基本単語の蓄えや文法構造は現代ロシア語の基礎として保持された。

(2) 言語は上部構造とは根本的に異っている。言語はあれやこれやの土台によつてうみ出されるものではなく、何世紀にもわたる社会の歴史といくつもの土台の歴史との歩みの全体によつてうみ出されたものである。言語はある一階級によつて作られるものでもなければ、ある一階級の要求を満足させるために作られたものでもなく、社会のすべての階級の要求をみたすために作られたものである。言語が人間の交通手段として奉仕する役割は、他の諸階級を犠牲にして一階級に奉仕するのではなく、社会のすべての階級に同じように奉仕するところにある。ウクライナ語、ベロロシア語、ウズベック語……はいずれも、新しい社会主義制度に奉仕しているように、これらの民族の古いブルジョア制度にも奉仕したのである。

言語は数多くの時代の産物であつて、そのあいだかかつて形成され、豊かになり、発展したものであるから、どんな土台や上部構造とも比較にならないくらい長生きする。

(3) 上部構造は、人間の生産活動と直接に結びつくものではない。それは、間接に、つまり経済構造を通じ、土台を通じて生産と結びつくに過ぎない。だから、上部構造が生産力の発展水準におこつた変化を反映するのは、いきなり直接にするのではなく、土台における変化のうちに、生産における変化が土台における変化として屈折するのを通じてである。これは上部構造の作用範囲がせまく、限られていることを意味する。ところが、言語はこれとは反対に、人間の生活活動と直接に結びついており、また生産活動ばかりでなく、生産から土台までの、土台から上部構造までの、人間のあらゆる活動分野とも結びついている。だから、人間のあらゆる活動分野を包括する言語の作用範囲は、上部構造の作用範囲よりもはるかに広く、多面的である。それどころではなく、それはほとんど無際限である。

(4) 民族語は擬制にすぎず、実在するのは階級語だけだという主張がある。その根拠は、人間は言語を自分の階級的な利益のために利用し、独自の語彙や独自の用語や、独自の表現を言語におしつけようとする、かくて「階級的な」方言やサロン語や通用語などが出来上るということにある。

しかし、それはまちがいである。第一に、これらの通用語や方言は、文法構造を持っていないし、また基本単語の蓄えを持っていない。第二に、方言や通用語は、ある階級の上層部の人間の間に狭い通用範囲を持ち、社会全体にとつて、人間の交通手段としては、役立たないからである。したがつて方言や通用語は、全人民的な民族語の分枝であり、なんら言語としての独

立性がない。

(5) レーニンを引合いに出して、言語を文化のまきぞえにして、文化とともに言語を上部構造となす同志がある。その次第はこうだ。レーニンは、資本主義のもとでは、ブルジョア文化とプロレタリア文化の二つの文化を認めている。このことは全く正しい。ところがある同志たちはレーニンの「二つの文化説」を引合いに出して、言語も二つあるべきだという結論を出している。言語は文化と結びついているという理由で。

これらの同志の誤りは言語と文化とを同一視している点にある。文化と言語とは二つの違ったものである。文化はブルジョア的でも社会主義的でもあり得るが、交通手段としての言語はいつでも全人民的言語であり、ブルジョア文化にもプロレタリア文化にも奉仕することが出来る。これらの同志は、二つの相異なる文化の存在が二つの相異なる言語を形成する、すなわち単一の言語の必然性が否定されることを主張することによつて重大な誤りをおかしている。

(6) 言語の特徴から先ず言語の要素を図式的に示してみる。

言語 { 語彙構成 言語のうちにあるすべての単語の合計。語彙構成のうちの主要なものは基本的単語の蓄え。  
文 法 単語の変化と文中の単語の組合せの規則の集成。

語彙構成は社会制度の変化、生産の発展、文化や科学などの発展につれて生まれた新しい単語を、現行の語彙構成に補充するという具合に変化する。基本的な単語の蓄えについて言えば、だいたいにおいて保持され、語彙構成の基礎として利用される。

文法は単語の変化の規則や、単語を組み合わせて文を構成する規則を規定し、調和のある意味を持った性格を言語に与える。文法は人間の思惟の長期にわたる抽象活動の成果である。文法の構造は幾世代もかかつて作りかえられ、言語の血となり肉となつたものであるから、基本単語の蓄えよりもずっとゆつくり変化する。

かくて言語のねばり強さは、言語の文法構造と基本的な単語の蓄えがねばり強いことによつて説明される。

マルクス主義は、言語発展における突然の爆発、すなわち現行の言語が突然に死滅し、新しい言語が突然に構成されることを認めない。

数十頁にわたるスターリン論文の要旨は以上に尽きる。

さて、以上、言語は上部構造でないとするスターリンの理論は一切の疑点を一挙に吹き払う明快さを持つており、恐らく何人の反駁も許さない説得力を持つていると思われる。尤も専門の言語学者から見れば部分的に問題があるかもしれない。例えば、文法を単語の変化と文中の単語の組み合わせの規則の集成であると定義することが妥当であるかの如き問題。しかし、仮りにこの定義に難があつたにしても、それは局所的な傷とも言うべきものであつて、論文の本筋には些の影響も与えない。

ところが翻つて思うに、「言語は階級的でない」とする論旨が即座に何人をも首肯せしめるものであるということは、その内容が常識的なものであるという事実を物語つていゝるものではないだろうか。端的に言えば、階級というものにこだわらない立場からすれば、ほとんど問題にするに当らぬ当りまえの理論なのである。若し然らば、この常識的な論文がソヴェト共和国の内外で大反響を喚び起した事実をどう説明したらよいのか。

これに答えるには先ず、スターリン論文の現われるに至つた経緯をふりかえつてみる必要がある。



第4の間「ブラウダが言語学の諸問題に関する自由討論を開始したのは、正しいやりかたであるか」——これに対するスターリンの回答によつてこの経緯は明らかである。

「経緯」に入る前に私は一言したい。まず私はこのような間の抜けた質問が「青年同志」の一人からなされたという事実に奇異の感を懐く。「いけない」と言われたら「ブラウダ」は自由討論を打ち切ることになるのだろうか。それとも続行するのだろうか。続行したとすれば、どういう事態が発生するのだろうか。そもそも言語の問題などで、自由討論がいかかわるいかという質問を一国の首相にする心理は尋常ものではない。このような心理をおこさせるものは何であるか。かりにこの心理を例外者の心理であるとしよう。そうすれば、スターリンは相手にしない方がよかつた。然し、回答する必要のある事態の存在することも事実だ。そうであれば、スターリンは、質問に対する回答としてでなく、個人的な意見として論文を書いた方がよかつたのではなからうか——若しスターリンがソヴェト国民の名誉を思うならば。私の疑問は7月の空の入道雲のように次々にわき起る。しかし、それはこちらの勝手な想念だ。本論に入る。

さて、「ブラウダ」のやりかたは正しいという御託宣である。曰く、「正しいやりかたである。この討論によつて、中央ならびに諸共和国の言語学研究機関に、科学や科学人にあるまじき状態が支配していたことが明らかになった。ソヴェト言語学の状態をすこしでも批判したり、言語学における「新学説」に対してごく控え目な批判をやつただけでも、言語学の指導者から迫害を受けたり、阻止されたりした。」

続けてスターリンが述べているところによると——。

かつてソヴェト言語学界に支配的勢力を持つた人物にエヌ・ヤ・マールなる人物がいた。その学派の勢力は絶大であつて、彼の遺産に批判的態度をとつたり、その学説にすこしでも不賛成を示せば、有能な研究者が職を追われたり、地位をおとされたりした。批判の自由が認められなければ、どんな科学も発展しないことは一般に認められていることだ。だが、こうした一般に認められた基準が、全くむざうさに踏みにじられていたのである。

どうしてこんなことが起つたのであろうか。言語学界におけるアラクチエフ的支配<sup>(1)</sup>が無責任をつちかい、こうした無法行為を奨励したために、こうしたことが起つたのである。討論が極めて有益であつたのは、こうしたアラクチエフ的支配を明るみに出し、これを粉碎したからである。

しかし、討論の利益はこうしたことに限られない。討論は、言語学界の古い支配を粉碎したばかりでなく、言語学界の指導層が、この科学部門の重要問題に対して、信じられないような混乱した見解を持つていることを明らかにした。討論が始まるまでは、エヌ・ヤ・マールの「弟子たち」は沈黙していた。しかし、討論が始まると、もはや黙つて通すことは許されなくなつた。そこで、彼等は新聞紙上で発言した。その内容は？ エヌ・ヤ・マールの学説には多くの欠陥、多くの誤り、究明不足の命題があることの自認。然らば、彼等は何故、もつと前に、科学者にふさわしくこのことを言わなかつたのか。

エヌ・ヤ・マールの「若干」の誤謬を認めておいて、彼の弟子たちは、自分等がマルクス主義とみなしているエヌ・ヤ・マールの「明確にされた理論」に基づいてこそソヴェト言語学を発展させることが出来る、と考えているようだ。大ちがいだ。エヌ・ヤ・マールの「マルクス主義」などまづびらだ。彼は実際、マルクス主義者でありたいと願ひ、そうならうと努力はしたが、彼はマルクス主義者にはなれなかつた。彼はたかだか、プロレットカルト主義者<sup>(2)</sup> ないしはラップ派<sup>(3)</sup> のように、マルクス主義の簡易化、卑俗化をはかるものに過ぎなかつた。

エヌ・ヤ・マールは、言語を上部構造とみなすまちがった非マルクス主義的定式を言語学にもちこみ、彼自身を混乱させ、また言語学を混乱させた。

エヌ・ヤ・マールは、マール以前の言語学にあつた一切のものをむきだしに軽々しく否定するおよそマルクス主義者にあるまじい、不遜な調子を言語学界に持ちこんだ。

エヌ・ヤ・マールは……………。

エヌ・ヤ・マールは……………。

エヌ・ヤ・マールと、特にその弟子たちの言うことを聞けば、エヌ・ヤ・マール以前にはなら言語学というものはなく、言語学というものはエヌ・ヤ・マールの「新学説」とともに生まれたものだと考えがちである。

言語学におけるアラクチエフ的な支配を根絶し、エヌ・ヤ・マールの誤りを放棄し、言語学のうちにマルクス主義が根を張るようにすること、——私の考えでは、これがソヴェト言語学をすこやかにすることの出来る道である。

以上が「4つの質問」がなされ、その答えとしての論文が出来た経緯である。

先ず、第4の問いに対するスターリンの答えは、「言語は上部構造に非ず」とする、理論に劣らず明快だ。だが、私はこれを読んで、スターリンの理路の明晰さに感じ入るだけですすことは出来ない。むしろ、彼の文章を通して見られる「ある事態」に、より深い関心を持たざるを得ない。「ある事態」とは何か。私は疑問を提出することから始める。

討論で明らかにされたところによれば、ソヴェト言語学の現状をすこしでも批判しただけでも迫害を受けた。これは学問の世界における独裁だ。しかも、この独裁がかなり長期間にわたつたことは文脈から推して明らかだ。このような状況を成立させるものは何であるか。

この情況は、エヌ・ヤ・マールが、「マルクス主義に立っていたという事実」に照応するものである。

ところで、マールの拠つたマルクス主義は「似而非マルクス主義」であつたとされる。然らば「真正マルクス主義」と「似而非マルクス主義」との判別は誰がするのか。世論か。そうではないことは、言語学の問題が、マルクス主義に依拠すると自認するグループの専断に委ねられていたという事実によつて知られる。個人か。そうらしく思われる。現にスターリンがこのことをやつているという事実によつて。文化の一領域に関する論争点が一個人の裁断によつて結著する体制こそは私のいう「ある事態」なのである。この体制のもとでは、言語学の領域ではかつてマールという小独裁者が支配していた。ところが今や彼の依拠するところが似而非マルクス主義であつたことが、「真正マルクス主義」に依拠する「大独裁者」によつて暴露されたちまちま葬り去られることになつた。

スターリン論文が大反響を喚び起したわけは何か。それは言語学界に革新の気を吹き込んだということだけであろうはずがない。それはマルクス理論の理解の仕方に新生面を開いたことにある。第二の間「言語はいつでも階級的であつたし……は正しいか」に対するスターリンの解答の部分がそれを明らかにする。ここでスターリンは、マール派が、マルクスをはじめとして、彼の名だたる後継者たち、エンゲルス、ラファエルグ、レーニン、スターリン自身の文章や言葉を引合いに出して、言語の階級性を論証し、単一の民族語の存在を否定しているのを不可とし、その誤りを指摘し、正しいマルクス理論の解釈、正しい結論の導き出し方を懇切に教えている。このスターリンの企てこそは、マルクスやエンゲルスの片言隻句をとらえ、これに主観的な解釈を下すことによつて、自己の主張や理論を武装し、これに安住する立場、すなわち

教条主義を打破したものであつて、その意義は言語学界に新風を吹きこんだということにつかない。ともすれば固化し、化石化しがちであつたマルクス理解に一大警告を発することによつて、マルクス理論そのものの発展に一つのエポックを作つたという意味もあるに相違ない。同時に、迂闊には近づき難いマルクス理論から、そのタブー性を除き去ることによつて、思想のことにたずさわる人人を重圧感から解放するに効力があつたことも否定出来まい。大反響を起した所似である。

だがこれによつて「百家争鳴」の実はあがつたであらうか。

## 2 その示唆するもの

共産主義の世界では、マルクス・レーニンの言葉が事物の判断の根本基準とされることは、誤りをおかしたエヌ・ヤ・マール派も、これを批判したスターリン自身もマルクス・レーニンに依拠している事実によつて明白である。同時に、スターリンの裁断によつて言語学の問題が結着を見た事実によつて分るように、マルクス、レーニンの後継者たちの言説も基準になる。人人は問題毎に根本基準に照準を合わせて判断しなければならない。ところがここに問題がある。それは拠るべき基準の見出されぬ場合である。マルクス・レーニンやその後継者たちも、刻々に変化する容観状況の下に出現する新しい問題の解決に応ずるような基準を、余さず示しているわけではない。また基準が示されていても、具体的な問題に直面して、いくつかの判断のうち、何れが根本基準により適合しているかに疑義の発生する場合もあり得るだろう。もちろん、比較的に中立的で自由な判断を許すケースも多々あるはずである。

私は種々のケースは次の6つに網羅されると思う。

(1) 事物の判断に際して、根本基準を何等の疑義なく適用し得る場合。

例えば「資本主義の復活を試みてはならない」という基準を適用する場合がこれに当る。

(2) 根本基準そのものは明確であるが、当面の問題の処理に際して、何れの判断が最も妥当であるかについて疑義の発生する可能性のある場合。

例えば日和見主義の排斥は原理的には明確であるが、実践においてはこれを酌子定規的に適用出来ない場合があり得る。殊に戦闘中は、その適用はそのときどきの状況によつて伸縮自在でなければならぬ。時宜を得ない猪突的な行動は冒険主義の誇りを受け、大事をとり過ぎると日和見主義の名によつて断罪される。毛沢東は「矛盾論」の中で次のように書いている。「1927年に、中国の大ブルジョア階級がプロレタリアートをうち敗つたのは、かれらが中国プロレタリア階級の内部（中国共産党の内部）の日和見主義を通じて影響をおよぼしたからである。われわれがこの日和見主義をなくすると、中国革命は新しい発展をとげた。その後、中国革命が、また敵から重大な打撃をうけるにいたつたのは、われわれの党内に冒険主義がうまれたからである。われわれがこの冒険主義を清算したとき、われわれの事業もまた、新しい発展をとげた。この点から見て、ある政党が革命を勝利に導びこうとするには、自己の政治方針の正しさと組織の強固さとをたのみとしなければならない。」<sup>9)</sup> 毛沢東の言っていること自体には疑義をさしはさむ余地はない。戦争の正しい指導のためには彼我の状況とそれを取りまく客観的情勢を的確につかんでいなければならない。ただこのことは誰にでも出来ることではない。的確な情勢分析には、豊富な経験に裏づけられた高い知恵を必要とする。このことを反面から見れば、或る行動が日和見主義であるか、そうでないか、或る行動が冒険主義であるか、そうでないかについての判定は、判断者の主観によつてなされることになる。

（ここで、主観によつてなされるとは、相異なるいくつかの判断を容れる可能性のあることで

あつて、必ずしも一面的、偏頗であることを意味しない。)

経験主義の排斥もこの範疇に入る。毛沢東によれば、中国の経験主義者や教条主義者が誤りをおかすのは事物の見方が一面的・表面的・主観的だからである。<sup>(4)</sup> 毛沢東の言っていることはよく分る。然し、二人の人間が同一事態について異なる判断をして譲らぬ場合に、互いに相手の判断を一面的、表面的となすことは決して診らしいことではない。経験主義自体は不可とするも、或る判断を主観的、一面的となすか、あるいは、客観的、全面的となすかは当事者の主観による外ない。

(3) 根本基準に新しい解釈や修正がなされる場合。相互に調和しないいくつかの基準が与えられていて、そのいずれかを選択する場合を含む。

これは主として客観状況の変化に対応するためにとられる手段である。レーニン、共産主義インターナショナル第二回大会のために書いた「民族問題と植民地問題についてのテーゼ原案」のなかで、封建的あるいは家父長制的農民的な諸関係が優勢な、もつとも後れた国家と民族に対しては、第一にすべての共産党は、これらの国のブルジョア民主主義解放運動を援助しなければならないと述べている。<sup>(5)</sup> 客観状況に応じた戦術としては極めて適切な方策であつたに相違ないが、若しこれと同様の発言がレーニン以外の者によつてなされたとしたら、揚げ足をとられる怖れがなかつたとは言えまい。仮りに当時は、基準から著しく逸脱していなかつたとしても、現在の状況の下でこのような主張をしたとしたら大きな物議をかもし出すことは必定である。同じテーゼ原案の中でレーニンは、資本主義のもとにおいて諸民族の平和的共存と平等が可能であるという考えを素町人的な幻想とけなしている。尤も、「資本主義の下では」だから、それは当然のことである。ところが、ソ同盟共産党第20回党大会におけるミコヤンの演説によれば、レーニンは平和と、すべての国との外交および通商関係ををうむことなく提案したことになつているし、さらにすべての国との同盟にさえ賛成している。<sup>(6)</sup>

すべての国との同盟に賛成するという言辭は外交辭令としか受けとれない。どう見てもレーニンの本音ではない。このようなものを、何人からも咎められることなく、自己の主張の典拠となし得る者は権力者以外にはない。

(4) 根本基準に解釈を加え、それとは別箇に事物を判断して、両者を結びつける場合。

スターリンの「言語学の諸問題」がこれに当る。これについては後で触れる。

(5) 拠るべき基準を求めるのが困難な事からに関する場合。

レーニンが実行したプロレタリア階級内に於ける「党の独裁」はこれに当る。これは指導者の判断による臨機応変の処置である。

(6) 自由に判断し得る場合。

比較的純個人的な生活内容に関する事項。結婚、恋愛など。

さて問題は(4)である。先ず(4)の前半「根本基準に解釈を加える」に該当する部分を「マルクス主義と言語学の諸問題」から拾つてみる。

言語が上部構造であるとするマール学説の根拠の一つとなつたのはマルクスの「神聖家族」のなかの「ブルジョアは自分の言語を持ち、この言語はブルジョアの産物であり、重商主義と売買の精神につらぬかれている」なる文章である。ところが、スターリンによると、若しこれらの同志がこの問題を客観的に扱うならば、彼等は「聖マックスの中から、違つた引用をもたすべきであつた。マルクスはそこでは、単一の民族語がどんな道をたどつて形成されるか、という問題にふれ、「経済的、政治的集積にもとづく諸方言の単一の民族語への集積」について

述べている。だからマルクスは上級形態としての単一の民族語の必然性を認めたのであつて、諸方言は下級形態としてこれに従属することになる。スターリンは続けて述べる。ではこの場合、マルクスが「ブルジョアの産物である」というブルジョアの言語とはいつたい何であるか。マルクスはこれを、特別の言語構造を持つ民族語と同じような言語とみなしたのであるか。もちろん、そうではない。マルクスは単に、ブルジョアが、その小商人的な語彙を以つて単一の民族語をけがしたと、したがつて自己の小商人的な通用語を持つていたことを、言いたかつたのである。

つまり、これらの同志はマルクスの命題を歪曲したことになる。だが、これを歪曲したのはマルクスをマルクス主義者としてでなく、問題の本質をきわめないで経文読みとして用引したからである。(第2の問いに対するスターリンの答えより)

以上によつてマルクスの与えた根本基準に対する解釈は見事に果されている。

然らば(4)の後半「根本基準とは別箇に事物を判断して両者を結びつける」はどれに当るか。

イデオロギーにかかわりなく、スターリンが言語そのものに関する理論を展開している部分がすべてこれに該当する。例えば、文化と言語との相違に関する理論や、文法構造と基本的単語の蓄えがイデオロギーの変化に比べて比較にならぬほど緩慢であるという理論など。

さて、スターリンは(4)の前半後半の雙方を見事に始末している。ところで、このような方面の仕事の成否は、「マルクス主義者」であるか否かのみによつて決まるのではない。現に、マールはマルクス主義者であろうとした。しかし不敏の故になれなかつた。これに個人的な才能、力量が大巾に与つてゐることは、現にスターリンが、言語問題の解決に見事な手腕を発揮していることによつて明らかである。随つてこう言える。マルクスの根本基準の解釈並びにその適用は、人を得なければ歪められる可能性がある。現に、言語学の問題に関して、エス・ヤ・マール派がそれをやつていたように。だから、このケースも、個人的な主観によつて左右される可能性がある。

私はさきに、スターリン論文は教条主義の打破という点において、言語学の問題の解決ということよりも、むしろ大きな意義を持つと述べた。このこと自体はマルクス主義を正当な軌道に載せ、これを発展せしめるに不可欠の手段であつたに相違ない。だがそれはまたも「或る事態」を示唆するに十分だ。それは何か。学界の問題を、最終的な裁決者の力を借りて一挙に解決しようとして怪まない独特の社会心理がそれである。そして、この社会心理に呼応して、事実一人の権力者によつて最終判決が下された。

事態を公平に見ようとするならば、われわれはスターリンが言語学界を正しく指導し、教条主義を打破したことに無条件の拍手をおくるだけではすまされまい。第1に、一人が起きて働き、万人が眠っている状況は見た目にわるい。第2に、スターリンの無謬はアプリオリではない。

すでに明らかにしたように、(1)から(6)にわたるケースの中、その大半に個人的な主観の入る余地がある。若し然らば、事物の処理に当つて人人の間に見解の相違の生ずることは必定だ。その裁決に当つて、或る特定人の判断の絶対性を信奉する程危険なことはない。この危険は事実となつて現われた。或る者は修正主義者として糾弾され、或る者は日和見主義の故を以つて権力の座から追われ、或る者は人民の敵と密通したとの汚名を帰せられて、正規の裁判によらずして処刑された。禍いを蒙つた者の中にはその名に値した者もいた。しかしまた、少なからざる人人が権力者亡きあと、その名誉だけを回復した。

一見して、これと反対のケースも起ることがある。前述の共産党第20回党大会におけるミコヤン演説がそれだ。この演説はスターリン批判のきつかけを作つたものとして聞えているが、この演説で、それにも劣らず注目すべきはソヴェト国内のあらゆる分野にわたる弱点、欠陥と言ふべきものを容赦なく衝いたことである。それはソヴェト自身に対する警告として述べられたものであるが、しかも、恐らくソヴェト国民の誰もが、公的にはもちろん私的にも、口にするのを憚る底の、暴露的な内容のものである。その一二。「われわれは、資本主義の現段階を研究する仕事でひどくたちおくりており、事実と数字とのふかい研究を行つておらず、近づきつつある恐慌や勤労者の貧困化についての個々の事実を、扇動のためにつかみだすだけにとどまつて、外国の生活のなかでおこっている諸現象を全面的にふかく評価しないことがしばしばある。……」「残念なことに、統計資料は、あいかわらず、スタロフスキー同志の中央統計局に死蔵されている。経済学者たちはいまなお、この統計資料を研究する可能性をうばわれており、経文読みの役割、ふるい定式やふるい資料をいたずらにくりかえす反覆者の役割をはたすように運命づけられており、このことが、わが国の経済学者に創造的な労作がみられない理由のひとつとなつている。」内に対する批判の厳しさに比例して、外を見る眼は柔軟寛闊であつた。「アメリカには、ソヴェト経済の研究に従事している学術機関が15以上もあるということだが、この事実注目しないわけにはいかない。……しかし、そこでは、非常に多くの学者がソ同盟の経済的發展についての資料の蒐集と研究に従事していることは、事実である。」

言つていることは事実であり、又言う必要があつたから言つたものであるに相違ない。しかし、門外漢たるわれわれでさえ気になる、——一体ミコヤンはその反響をどう評価してしていたのであるかと。大会におけるソヴェトの内情の暴露は世界の面前にソヴェト体制の弱点をさらけ出すに等しい。そのはねかえりを最も強く受けるのは外ならぬ指導者たちであるはずだ。もちろん、従来の指導者の誰もが敢えて為さないことである。当然なことだが、ミコヤンはアメリカ「帝国主義」に対する警戒を力説することを怠つてはいない。それにしても、我の短を戒めるために、敵対者たる彼の長を挙げることは尋常のことではない。私はミコヤン演説にミコヤンの良心のたしかさを見る。

ミコヤン演説に感服しつつも、またしても私は、心の一隅に或る疑惑の生ずるのを禁ずることが出来ない。

この演説でミコヤンは出席党員の、したがつてまた全人民の意表を衝くようなことがらをいくつか述べた。禁忌とされていたスターリン批判もその一つ。革命の平和的な發展の道を説いたのもその一つ。そして恐らく、諸国民のあいだの合理的な分業による国際貿易を推奨したことや、国家資本主義を弁護していることなども。もちろん、レーニン主義の或る一面に依拠しながら。

さて、意表を衝いたということは、予期されていなかったことを発表したということに外ならない。しかし、予期されていなかったことは、「期待に反したこと」と同一ではない。その証拠に、演説は「あらしのようななりやまぬながくつづく拍手」のうちに終つたのだから。ひらたく言えば、言いたくても言えないことをミコヤンが代弁してくれたということなのだ。

さきに私はミコヤンの良心のたしかさを称讃した。が、讃歎の声はその大胆卒直さにも向けられてよい。

良心の自由という成句がある。この成句には歴史的由来があるが、単独で用いると熟していない。<sup>7)</sup> 信念表白の自由と言ふべきである。ところで、ミコヤンが信念を表白する自由を持ち

得たのは、彼がそういう「座」にいたために外ならない。彼は或る意味では大胆であつた。しかし、彼は彼の「座」の故に、生命や地位を堵ける決心をする程に大胆である必要はない。

平党员はどうだろうか。そして一般人民は？

仮りに、彼等がミコヤンと信念を等しくしていても、彼等に信念表白の自由が与えられていないことは明らかだ。相手の腹を臆測する道が閉ざされている以上、そして又、人の意表を衝くが如き性質のものであるだけに、信念の表白は、一切の地位と立場の放棄を結果する恐れがある。

支配者のみが完全な信念表白の自由を持ち、被支配者にその道の閉ざされている体制、ここにも私は断絶を見る。

### 3 独裁と断絶

「マルクス主義と言語学の諸問題」は社会主義社会における自由のありかたについて、或る種の示唆を与えるに十分である。

元来、マルクス主義の自由には二つの方面がある。「物質からの自由」と「隷従からの自由」がこれである。もちろん二つの自由は表裏一体をなしている。同一事態の二つの面である。そして、形式的に見れば、マルクス主義の提出したプランは二つの自由を充足していると見てよい。然し、私は、社会主義圏において、当然問題にさるべくして問題にされない今一つの自由の領域のあることを指摘せざるを得ない。それは劣勢者の側における批判の自由である。それは共産圏の指導者たちが関説することを注意深く避けているものである。そして、その理由は明白である。国の内外の抵抗を排して史上未曾有の大革新を遂行しているときに、少数者の意見に拘つていられるものでないことが一つ。反対意見を周知せしめることによつて国民の団結にひびの入る恐れがあることも計算に入れないわけにはいくまい。さらに、社会主義は生産と消費との両面にわたつて、厳密な計画を必要とし、これを実施するには、強力な中央集権と一糸乱れざる統制を必要とすることも考えられる。所詮、独裁は、社会主義国家には免れ難い。ここで「独裁」はいわゆるプロレタリア独裁、すなわち政治権力を手中におさめたプロレタリアートが、ブルジョアジーの残存勢力に対して行使する独裁を意味しない。今、私の問題にしている「独裁」はレーニンのいわゆる「党の独裁」に近い。党の独裁は、前衛としての党がプロレタリア階級自身に対して行使するものであつて、レーニンによつて指導の意味に転義されているものである。<sup>(4)</sup> 党とプロレタリアートとのこのような関係は、党内における指導者層と党员一般との関係においても成立する必然性を持つ。また最高指導者と指導者層との関係においても。かくて、階級を基底とし、党の最高権力者を頂点とする階層的な支配機構の成立を見ることは原理的に免れ得ない。

独裁は革命政権にとつて免れ難い政治形態である。然し政治の常道からは遠い。社会主義は現状に止つていてはならない。事実、それは共産主義への過渡的段階であるとされている。各人が完全に自由であり、「各人の自由な発展が万人の自由の条件となる如き社会」への。<sup>(5)</sup>

然らば、この二つの社会はどのようにつながるだろうか。

既に述べたように、社会主義社会にあつては、強力な中央集権制と厳格な統制が必要である。統制は人間生活のほとんど全面に及ぶ。ここでは、政治と思想に関する限り、マルクス・レーニンの正しき理解の下に発言するか、さもなければ沈黙を守る。それ以外は、死か追放かの何れかである。この事態と、共産主義社会における完全自由の状態とは如何につながるか。

また、社会主義社会においては分業と経済統制が行われている。しかも、この分業と統制たるや尋常のものではない。このことは、共産主義社会の分業なき事態と如何につながるか。

マルクス主義によれば、社会主義から共産主義への発展は連続的移行によるとされる。両者の間には、社会主義と資本主義との間におけるような敵対関係がないからである。だが、分業のあるとなしの差違は容易ならぬものである。前者から後者への移行には、飛躍を必要としないかも知れない。しかし、少くとも主体的には一つの大きな断絶がある。何故ならば、「万人」の自由な発展が「各人」の自由の「条件」をなすというのであればともかく、「各人」の自由な発展が「万人」の自由の「条件」をなすような状態は、如何なる現実ともつながらないからである。

現実と実践目標との間に断絶があり、かつこの断絶が一定の期間内に急速に克服さるべきことが要請されるとき、その政治形態は多かれ少なかれ独裁主義とならざるを得ないであろう。その理由は比較的簡単である。このような断絶の克服は人間存在の主体的条件と客観的条件とを一挙に変革することに外ならない。しかもこの断絶が社会的な断絶である以上、その克服すなわち飛躍はあたかも一人の如く行動する一大集団によつて行われるわけである。このことは各人が自由に見解を表明し、衆議によつて事を決する方法のよくするところではない。

社会主義の目指す究極の目標はすべての個人の完全な自由であつた。「物質からの自由」と言い、「隷従からの自由」と言うのも、このような自由に至る一つの階梯に過ぎないのである。ところが、これまで私の見て来た限りでは、このような自由の実現されつつある証跡はない。むしろ、多くの事例は完全にこれと逆の方向を示しているようにしか見えない。何故にそうなのか、その因つて来たとを具体的な事例に即して説明することは比較的容易だろう。然し、それだけでは、問題を根本的に究明したことにはならない。権力者の性格、そのおかれた境位等のいわば偶然的条件によつて左右される面が余りに大きいからである。私はこの問題の究明には、断絶観そのものに照明を当てることが不可欠の要件であると思う。現実と余りに隔絶せる世界、この世界の実現のためにこそ「自由」の抑圧も已むを得ないのであり、そしてこのような世界の実現を信奉せしめる根拠をなすものが断絶観に外ならないからである。

#### IV 唯物弁証法の問題点

以上、私はマルクス主義の倫理が断絶観によつて支えられていることを明らかにし、このような断絶観によつて構想された新しい倫理秩序における自由実現の可能性について若干の考察を加えた。自由実現の可能性の問題は断絶観の検討を省いては論ずることが出来ない。ところで、断絶観は言うまでもなく唯物弁証法（以下弁証法と記す）に支えられているから、結局この問題は弁証法を検討することなしには、根本的な解答は得られない。

弁証法は広汎な問題を含んでいるから、その全面に及ぶことは小論のよくするところでない。ここでは「可能性」と直接に関係のある部分すなわち断絶観に問題をしばつて考察することにする。然し、或る程度、弁証法の核心に触れることなしには、断絶観を検討すること自体が不可能である。私は先ず弁証法の一般的な問題点を検討することから始める。

##### 1 問題探求の足場

先ず私は弁証法に関するマルクスとレーニンの見解とエンゲルスのそれとを比較することによつて、弁証法の問題点を探る足場を作ることにする。レーニンの「人民の友とは何か」の中に次のような文章がある。「批判にとつて重要なのはある事実と他の事実とをできるだけ精密に研究すること、また、それらが現実互いに異なる発展契機をなしていることだけであつ



て、とりわけ諸制度の系列を、すなわち、もろもろの発展段階があらわれてくる継起と連続をこれに劣らず精密に研究することが重要である。つぎのように言う人もあろう。だが経済生活の……諸法則は同一であつて、それを現在に適用しようが過去に適用しようが、まったくどうでもよいことだ、と。これこそマルクスの否定するところである。……その反対に、どの歴史的時代にも、それ自身の固有の法則がある。……経済生活がわれわれに示すところのものは生物学などの他の諸分野における発展史に類似した現象だとなして、旧来の経済学者たちが経済法則を物理学や化学の法則に比較したのは、経済法則の本性を誤解したものであつた。……諸現象をもつと深く研究した結果は、もろもろの社会有機体が、植物体や動物体と同じように、相互に根本的に相違していることが証明された。……マルクスは、資本主義的経済制度をこの見地から研究し説明することを、自分の目標として設定することによつて、すべて経済生活の精密な研究が、かならず持たねばならない目標を、厳密に科学的に定式化しているに過ぎない。……このような考究の科学的価値は、一定社会有機体の発生、存立、発展、死滅、ならびに他の、より高度の社会的有機体との交替を規制する特殊な（歴史的）法則を解明することにある。』<sup>14</sup>

この文章は或る雑誌に掲げられた「カール・マルクスの経済学批判の見地」というマルクスに対する論評をマルクス自身が自分の立場を正当に評価したものとして『資本論』第二版のあとがきに掲げたものである。この文章の主眼点は、諸々の経済生活を支配する法則は同一でない、いずれの時代にも固有の法則があるから、それぞれの発展段階における特殊的法則を科学的に精密に解明しなければならないということにある。このようなマルクスの見地はマルクスの弁証法を考察する場合に、極めて貴重なものである。何故ならば、マルクスはヘーゲルの弁証法から、いわゆる「合理性の核心」すなわち「否定の否定」「質と量との相互転化」を摂取したにかかわらず、これを一般的法則としては取扱つてはいない。マルクスはこれを一つの規準として、具体的事物——資本主義発展の過程——に適用し、そこにこれらの法則の行われていることを即物的・経験的に確めたに過ぎない。マルクスの唯物弁証法は単にヘーゲルの観念弁証法を顛倒したものたるにとどまらない。

レーニンがこのマルクスの立場を踏襲していることは言うまでもない。レーニンは弁証法を定義して言う。「弁証法とは物の本質における矛盾の研究である。」（哲学ノート）「現実への接近のあらゆる種類のニュアンスを伴う（ニュアンスの一つ一つを全体にまで括げる哲学体系を伴う）生き生きとした、多面的な（無限に増加する）認識としての弁証法——そこには、形而上学的認識論に比較して、測り知れないほど豊富な内容がある。』<sup>15</sup>ここに事物の本質における矛盾の研究というとき、事物と認識する主体者との相互関係が想定されている。このような相互関係（相互滲透）を重ねることによつてのみ全体としての現実への接近も可能なのである。あらゆる事物に共通な一般的な法則を与えられたものとして受け取るのではなく、特殊な事物をその固有な本質において解明する行きかたはマルクスの方法と完全に一致するものであり、また認識としての弁証法と名づけられる所以でもある。認識活動の主体者とのかわりにおいて事物の本質を解明するという意味で、このような弁証法を主体的弁証法とも名づけることが出来よう。

ところで私は、マルクスの生涯の協力者であり、弁証法の理論を詳細に展開しているエンゲルスにマルクスやレーニンとは頗る趣きを異にした見解を見出す。曰く。「弁証法、すなわちいわゆる客観的弁証法は、全自然を支配しているが、いわゆる主観的弁証法、弁証法的思维は

自然のいたるところで行われている諸対立による運動の反映にすぎない。そして、この諸対立とは、それ自身のたえざる闘争と、その相互への、またはより高次の形式への終局的変化とによつて、まさに自然の生命を制約しているところのものである。』<sup>(4)</sup>ここに明瞭なことは、エンゲルスが主観を客観の反映以上のものと見ないこと、随つて弁証法は主体を捨象した自然法則として取り扱われていることである。このことは次の文章においていよいよ決定的である。「弁証法の諸法則が抽出されるのは自然の歴史ならびに人間社会の歴史からである。しかしながらこれらの法則は、これら二つの局面での歴史的発展と思惟そのものとのもつとも一般的な法則である。しかも要点においてはそれらはつぎの三つの法則に帰着する。

量から質への、またはその逆の転化の法則、  
対立物の統一の法則、  
否定の否定の法則。<sup>(4)</sup>

ここに「歴史的発展と思惟そのものとのもつとも一般的な法則」と言うとき、弁証法が純粹に客観的に取り扱われていることはもはや疑う余地がない。同じ趣旨は「反デューリング論」の中の次の文章にも現われている。「それでは否定の否定とはなんであるか。それは、自然、歴史、および思惟の、きわめて一般的な、またまさにそれゆえにきわめて広く作用しているところの、重要な発展法則である。すなわちそれは、動植物界や地質学や数学や歴史や哲学でおこなわれている法則である。<sup>(5)</sup>

さて、弁証法に関するエンゲルスの見解をマルクスやレーニンのそれとを比較してみると、一見して根本的な相違のあることが分る。そしてこの相違は次の二つに帰着する。

(1) エンゲルスの弁証法が客観界を支配する客観的弁証法であるのに対して、マルクスとレーニンの弁証法は客観と主体との相互関係としての弁証法である。

(2) エンゲルスは客観的諸事物に作用する一般的な法則を問題とするのに対して、マルクスとレーニンは特殊な事物に固有な法則を問題とする。

弁証法に関するこのような見解の相異は、弁証法の問題点を探る上の手がかりになり得るものである。

## 2 エンゲルスの弁証法

### 〔1〕 素朴な疑問

すでに述べたように、エンゲルスは「量から質への、またはその逆の転化の法則」、「対立物の統一の法則」、「否定の否定の法則」を弁証法のもつとも一般的な法則としているのであるが、「反デューリング論」で取り扱われている法則は次の四つの法則に帰着する。

「あらゆる物質は運動する。運動は矛盾によつて起る」「量から質への転化」「否定の否定」「飛躍」

ここで私はエンゲルスが、これらの法則を顕現しているものとして挙げている具体例を、それぞれの法則毎に列記し、その内容を検討してみる。

#### A 運動は矛盾によつて起る

##### a 力学的運動の場合

「運動そのものが一つの矛盾である。すでに単純な力学的な場所の運動でさえも、それが行われているのは、一つの物体が同一の瞬間に、ある場所にありながら同時に他の場所にあること、すなわち同一の場所にあるとともにない、ということによつてのみである。こうした運動の不断の定立と同時にその消滅こそが、まさに運動なのである。<sup>(6)</sup>

## b 生物有機体の場合

「すでに単純な力学的場所の運動でさえも、一つの矛盾を己れのうちに含んでいるとすれば、物質のより高度の運動形態はいつそう矛盾を含んでいるわけであり、わけても有機的生命とその発展とはとくにそうである。われわれはさきに、生命とは何よりもまず、おのおのの瞬間に同一物でありながら、しかも他のものである、という点に存することを見た。随つて生命もまた、諸事物と諸過程そのもののなかに存在する、たえず自己を定立しかつ解決する一つの矛盾である。そしてその矛盾がやめばただちに生命もまたやむのであつて、死が到来する。」<sup>(7)</sup>

「有機体なるものは、一定の瞬間において、同一物であつて同一物でない。それは時々刻々に外部から供給される物質を同化して、それと異なる物質を排泄する。時に刻々に個体の細胞が死滅して、新しい細胞が作られる。晚かれ早かれ、この個体の物質は全部更新され他の物質がこれに代るのである。これを以つて、あらゆる有機体が常に同一物であつて、しかもまた他の物なのである。」<sup>(8)</sup>

## B 量から質への転化

## a 無機物の場合

「水は正常の気圧の下では、摂氏零度で液体状態から個体状態となり、摂氏 100 度で液体状態から気体状態になる。だから、この二つの転換点では、温度の単なる量的変化が、水の質的に変化した状態をひき起すのである。」<sup>(9)</sup>

## b 人間事象の場合

「われわれは量から質への転化について、もうひとりの証人を呼び出そう。すなわち、ナポレオンを。彼は、乗馬は下手だが訓練のあるフランスの騎兵隊と、当時一騎打では無条件的に優秀だが訓練のない騎兵隊であるメマルク人との戦闘をつぎのように述べている。——2人のメマルク人は3人のフランス人よりも無条件的にすぐれていた。100人のメマルク人は100人のフランス人に匹敵した。300人のフランス人は300人のメマルク人より通常すぐれて居り、1000人のフランス人は、いつでも1500人のメマルク人を打破つた。」<sup>(10)</sup>

## C 否定の否定

## a 数学の場合

「ある任意の代数的量、すなわち  $a$  をとつてみよう。これを否定すれば  $-a$  が得られる。 $-a$  に  $-a$  をかけることによつて、この否定を否定すれば、 $+a^2$  が、すなわち最初の正量、とは言つてもより高い段階の、すなわち2乗された正量が得られる。」<sup>(11)</sup>

## b 地質学の場合

「地質学の全体は、否定された否定の一列、古い岩層の破壊と新しい岩層の堆積とのあいづぐ一列である。まず流動物質の冷却から生じた原始的地殻が、大洋の作用、気象の作用、大気の化学作用によつてこなごなになれ、そのこなごなになれた物質が海底につみ重ねられる。海底が海面上に隆起すると、この最初の層の一部は、あらたに雨、四季の温度の変化、大気中の酸素と炭酸ガスにさらされる。……数百万年を通じて、絶えず新しい地層が形成されるとともに、その大部分はたえずまた破壊され、そしてたえずまた新たな地層を形成する素材として用いられる。……種々さまざまな化学元素が交りあつて生じた、しかも力学的にこまかくくだかれた状態にある土地が出来上つて、さまざまな植物の成育が可能となるのである。」<sup>(12)</sup>

## c 生物の場合

「大麦の例。幾万億の大麦の粒は食料として消費される。だが、若しもその一粒が、それに

とつて正常な諸条件にあえば、それ独自の変化がそこに起る。つまり、発芽するのである。ここに麦粒は麦粒としては消滅し、否定され、そのかわりに、それから発生した植物が、すなわち麦粒の否定が現われる。

だがこの植物の正常な生涯はどんな過程をとるか。それは生長し、開花し、結実し、ついには再び麦粒を生ずる。そしてその麦粒が熟するや否や、茎は死滅し、否定される。

穀物の種子はきわめて徐々にしか変化しない。だから今日の大麦は、百年前のそれとほとんど同じである。ところが、観賞用園芸植物、例えばダリアか蘭をとつてみよう。若しもわれわれが、種子とそれから生じる植物を園芸家の技術に従つて処理するならば、この否定の否定の結果として、より多くの種子が得られるばかりでなく、より美しい花をつける。質的に改良された種子が得られる。しかも、この過程が繰り返えられる毎に、この改良が高度になつてゆくのである。』<sup>43)</sup>

#### d 歴史の場合

「すべての文化民族は土地の共有をもつて出発した。ある一定の原始的段階を経過したすべての民族にあつては、農業が発達するうちに、この共有は生産にとつて桎梏となる。それは廃止され、否定され、長短それぞれの中間段階のうちに私的所有に転化される。しかし土地の所有そのものによつてもたらされた農業のより高度の発展段階では、逆に私有が生産にとつての桎梏となる。——これは今日の小土地所有の場合でも、大土地所有の場合でも、同様にそうなっている通りである。また同様に土地の私有を否定し、それを再び共有に転化しようとする要求があらわれる。だがこの要求は、もとの原始的な共有の再建を意味するものではなくて、より高度なより発展した共有制の形態を意味するものであつて、これは生産の障害になるどころか、むしろはじめて生産を桎梏から解放し、生産に近代的な化学上の諸発見と機械的諸発明とをぞんぶんに利用できるようにするものなのである。』<sup>44)</sup>

同様な原則は資本の蓄積からその崩壊の過程にも当てはまる。その骨子。

自己の労働を基礎とする私的所有の解消（否定）

自己の労働を基礎とする小経営は資本主義以前の小経営である。このような経営は生産と社会との狭い自然発生的な限界に調和し得るに過ぎない。このような生産は、或る一定の高度に達するとそれ自身を否定する物質的な手段をうみ出す。「個人的で分散した生産手段」の「社会的、集中的生産手段」への転化。

以上が第一の否定。

第二の否定——資本主義的私的所有の否定。

第一の否定の結果、資本の本源的蓄積がなされ、資本主義的生産様式が始まる。資本主義的生産様式の発展によつて発生する事態は、(1) 資本の集中、(2) 小数の資本家による収奪 (3) 労働手段が、共同的でなければ使用出来ないような労働手段へ転化すること。(4) 生産手段を、結合された社会的な労働の共同の生産手段として使用することによる生産手段の経済化。

これらの発展につれて、資本の独占化が進行し、困窮、圧制、搾取の度合いが増加し、同時にこれに反抗する労働者階級の数も増加する。資本は、そのもとで開花した生産様式の桎梏となる。資本主義的私的所有が止揚される。』<sup>45)</sup>

#### D 飛躍

##### a 自然現象の場合

「あらゆる漸進性にもかかわらず、ある運動形態から他の運動形態への移行はやはりつねに飛躍であり、決定的な転換である。力学から個々の天体上の比較的小さい塊りの力学への移行がそれであり、その塊りの力学から分子の力学——われわれが本来あらゆる物理学で研究している諸運動、すなわち熱、電気、磁気を含む——への移行もやはり決定的な飛躍によつて行われるし、普通の化学作用から生命と呼ばれる化学現象への移行の場合にはなおさらそうである。ついで生命の領域内では、飛躍は次第に稀に、かつ目立たなくなる。」<sup>108</sup>

ここで私は、以上の実例から若干をとりあげて、それらがエンゲルス自身が述べている「弁証法的運動の条件」を満たしているかどうかを調べてみる。

弁証法的運動の条件とは次の如きものである。

常に同じ結果をうみ出すような、永遠の循環運動は反弁証法である。<sup>109</sup>

Bのa（水は摂氏零度で液体状態から個体状態へ……）を検証してみる。これは宇宙の原初から終末にいたるまで繰り返えされる循環運動ではないのか。すなわちゲンゲル自身の言葉によれば「常に同じ結果をうみ出すに過ぎないところの、形而上学的な反弁証法的運動」の、またレーニンの表現に従えば「死せる運動、非弁証法的運動」の典型ではないか。弁証法的運動の例としては失格。

Cのa（aを否定すれば $-a$ となり、 $-a$ を2乗すれば $+a^2$ となる）

aを否定する（実は反対にする）と $-a$ になるということについて。一体否定をするのは何者か。弁証法の原則によれば、事物はそのものの中に否定的な契機（矛盾）を含むが故に、否定の運動を起すのである。然るに、この例の場合には、否定するものは事物そのものすなわちaではない。ここでは「人」がやつているのだ。このことは $(-a)$ に $(-a)$ を掛けるというにいたつて決定的に明瞭である。この例は弁証法の原則をふみにじつたものである。

Cのb 麦粒の例。

これはBのaに対してなしたのと全く同じ批判があてはまる。一粒の大麦が発芽し、成長し幾十倍かの麦粒を生ずるのは、年々くり返えられる一つの routine となつている循環運動なのである。ところで愉快なのはエンゲルス自身がこのことを認めていることである。曰く、「穀物の種子は極めて徐々にしか変化しないのだから、今日の大麦は百年前の大麦とほとんど同じである。」

この文章は実はもう一つの例、観賞用園芸植物の品種改良の場合を引き出すためのものである。品種の改良はたしかに弁証法的運動の例としてふさわしいものである。エンゲルスは品種改良の例を挙げるることによつて、麦粒の例が弁証法的運動の例として失格であることを自ら証明したことになる。

このような批判に対して考えられる反論は次の如きものである。エンゲルスは、循環運動であろうとなかろうと、運動そのものは否定の否定、矛盾の解決として起ることを示そうとしたものであると。これに答えて私は次の如く言う。

たしかに麦粒や水の変化は運動であるに相違ない。だから、運動は矛盾であるという原則に従えば、弁証法的運動の範疇に入らぬとは言えない。然し、今われわれの問題にしている運動は、この種の一般的な運動ではない。仮りに、一般的な運動を持ち出して来て、特殊な運動を蔽うてしまうとすれば、特殊に関する発言はすべて無意味になる。現に、エンゲルス自身によつて反弁証法とされる循環運動も運動であるに相違ないのだ。若しも、運動は矛盾によつて起るという原則論で凡てを押し切ろうとするのであれば、「反弁証法的運動」に関するエンゲル

ス自身の発言は全く無意味になると。

Bのb ナポレオンの例。

この例には「循環運動」はあてはまらない。しかし、他の方面から問題がある。

メマルク人が一騎打に強くて集団戦に弱く、フランス兵が一騎打に弱くて集団戦に強いのは、両者の訓練システムの相違に過ぎない。偶々こうした訓練の体系を異にする二つの軍隊がぶつかったために、例話にあるような数的関係を示したのであるが、それは「量から質へ」とは何の関係もない。若しこの例の内容が、メマルク人なりフランス騎兵なりが、それぞれの領域において、人数の量の増大とともに戦闘力の質を異にしたというのであれば、「量から質へ」の例として理解出来るが、例話はそういう仕組みになつていないし、またそれを証明する手がかりもない。要するに一騎打に重点をおいて訓練された軍隊と集団戦に重点をおいて訓練された軍隊とが衝突した場合に発生する当りまえの現象を述べただけのもの。数の魔術に類する駄落。厳正なるべき理論の法廷の証人としてはナポレオンは全く失格。

なお、「循環運動を弁証法的運動に非ず」とする原則に照らせば、エンゲルスの種々の著作を通じて、彼が挙げている例話の中に不適切なものを無数に挙げることが出来る。下記のものはその中の若干である。

「分子式の量的変化がつねに質的に異なつた物体をうみだすとして挙げている炭素化合物の例」(反デュウリング論、第12章 弁証法、量と質)「前述のCのa。すなわち+aが否定されて-aとなり、再度否定されて $a^2$ として正に復帰する例。」「量から質へのもつとも簡単な実例は酸素とオゾンで、その場合2対3の比率が臭気にいたるまで全く異なる諸性質を生じさせる。同様に他の同素体もまた、化学では、分子中の原子箇数の差異によつてのみ説明される。」(自然弁証法)その他、生命と死に関する例、電気化学に関する例、摩擦と衝突に関する例。

要するに進化発展に関する実例以外は、尽く循環運動であつて、弁証法運動の範疇に入らない。

## 〔2〕 発展過程の特殊性は問題にしないのか、するのか

ところがエンゲルスには注目すべき発言がある。それは前掲の引用文「否定の否定とはなんであるか……」に続く文章である。

「かりに私が、たとえば大麦粒が発芽してから実を結んで植物が枯死するにいたるまでに通過する発展過程を、否定の否定であると言つたとしても、私はこの発展過程の特殊性については全く何も言っていないことは自明のことである。もしそうでないとしたら、積分計算もまた否定の否定なのであるから、私は、大麦の茎の生活過程は積分計算でもあるし、また社会主義でもあるなどという、無意味なことを主張することになるであろう。……私がこれらすべての過程について、それらは否定の否定であるという場合、私は、これらすべてをこの一つの運動法則のもとにひつくる<sup>(6)</sup>めているのであつて、またそれ故にこそ、おのおの個々の特殊過程の特殊性のことは考慮してはいないのである。だが弁証法とは、自然、人間社会、および思惟の一般的な運動=発展の法則に関する科学以上のものではない。<sup>(7)</sup>

先ず下線(1)において、動植物界、地質学、数学、歴史、哲学で行われている発展過程の特殊性については問題にしないとされている。その理由は、これらの発展過程が「否定の否定」という一つの法則にひつくるめられるからである。

とりあえず、これだけで種々の疑問が起きるが、これを三つにまとめてみる。

(1) これらの事物ははたして「否定の否定」でひつくるめられるだろうか。この問題について

ては本節〔4〕頂で立ち入って検討したいと思う。

(2) このようなやりかたは、異なる諸事物を共通の法則で割り切ることを戒めているマルクスの見解と真向から対立する。このことについてはすでに論じたから、ここでは取り扱わない。

(3) 大麦の発芽から枯死にいたるまでの過程に「否定の否定」の法則が作用していることを一般的に言つたまでであるとエンゲルスは言う。ここでエンゲルスは一般的論ですまして十分だと考えているのか、それとも、特殊な事物の発展過程についても述べる必要を認めているのか。若し後者の通りであるとすれば、エンゲルスはどこでそれを述べているのか。

この最後の疑問に対しては下線(3)が解答を与える。即ち「弁証法は運動＝発展の法則に関する科学以上のものではない。」これによればエンゲルスは、事物の特殊な発展法則に入らないことを建前にしていることになる。

そしてまた、次のことも明白である。彼の挙げている例には、これを内容的に分析してみると弁証法の事例として不適切なものが多数あるにかかわらず、これらの例が単に弁証法の諸規則のどれかを示しているということの故に、彼があえてこれらの事例を引き合いに出しているのであることが。エンゲルスにとっては、弁証法の諸法則のうちのどれかを現わしていさえすれば、何を持ち出して来てもよかつたのだ。

ところが、当然のことながら、また奇態なことにエンゲルスは時としてマルクスに還えることがある。

エンゲルスは言う。「マルクスは、歴史的経済的証明をなし終つたあとでひき続き次のように述べている。『資本主義的生産様式と資本主義的領有様式とは、自己の労働を基礎とする個人的所有の第一の否定である。資本主義的生産の否定はそれ自身によつて、一つの自然過程の必然性を以つてうみ出される。これは否定の否定である。』

だからマルクスは、この過程を否定の否定と言ひあらわしているけれども、そうすることによつて、それを一つの歴史的に必然的なものとして証明したい、と考えているのではない。その逆である。すなわち彼は、この過程は実際に一部分はすでに起つたし、一部分はこれから起るにちがいない、ということを歴史的に証明したのちに、さらにそれをある一定の弁証法的法則にしたがつて実現される一過程として特徴づけているのである」<sup>(4)</sup>

法則は歴史を支配する必然法則ではない、歴史に即して証明さるべきものであるというこの趣旨はマルクスの見解と全く一致している。エンゲルスはこの趣旨を次のようにも表現している。

「量から質への、またその逆の転化の法則、対立物の浸透の法則および否定の否定の法則は、すべてヘーゲルによつて、彼の観念論的なしかたで、たんなる思惟法則として展開された。……誤謬は、これらの法則が思惟法則として自然ならびに歴史に強制されていて、後者から導き出されていないという点にある。このことから、かのきわめてむりな、そしてときには身の毛もよだつ全構成がうまれるのである。すなわち、世界は、好むと好まざるとにかかわらず、それ自身人間思惟の発展段階の産物にすぎないところの一思想体系に合致すべきものとされるのである。」<sup>(5)</sup> この文章においてエンゲルスの衝いているのは、ヘーゲルにおいて、観念的實在すなわち超越的な思惟法則が自然ならびに歴史に押しつけられていることである。この点でエンゲルスはたしかにヘーゲルと一線を劃する。そしてまた、マルクスの見解と完全に一致している。

これによつてみるとエンゲルスは特殊性を問題にしているということになる。

## 〔3〕 エンゲルスとヘーゲルの近似性

エンゲルスは個々の事物の発展過程の特殊性を問題にするのか、しないのか。この点をいまいち追及してみよう。

エンゲルスは上掲の引用文に続けて言う。「弁証法的諸法則は自然の現実的発展過程の諸法則であり、したがって理論的な自然研究にとつても有効である、ということを示そうとしているに過ぎない。それゆえ、われわれは、これらの諸法則の内的連関にまで立ち入ることはできない。」<sup>10)</sup>

このように明瞭に述べている以上、「特殊性」は問題にしていなと見る外ない。

さて、特殊性を問題にしないことは、一般法則（弁証法の諸法則）を自然の発展過程にあてはめる、ことに通ずる。然らばこの点はどうなっているか。

エンゲルスは、弁証法の諸法則を観念論的に基礎づけるヘーゲルの立場を強く否定する。然し彼が次の如く言うとき、ヘーゲルにひどく接近していることが分る。「とはいえ、ヘーゲルを少しでも知っている者なら、ヘーゲルが何百という箇所で、自然および歴史のなかから弁証法の法則に対するもつとも適切な個々の証明を与えていることを知るだろう。」<sup>11)</sup> この文章にある通り、エンゲルスはヘーゲルの証明を適切と認め、そのうえ彼はヘーゲルの挙げている例を自らの例の範型となし、また時としてはそのまま借用さえしているのである。<sup>12)</sup> 彼が「客観弁証法は全自然を支配している」<sup>13)</sup> と言い、また「弁証法的法則は自然の歴史ならびに人間の歴史のもつとも一般的な法則である」<sup>14)</sup> と断ずるとき、事実上これを自然と人間の歴史の発展を規制する先験的な法則として取り扱っているものとみなさざるを得ない。

## 〔4〕 個々の事物の発展＝運動は弁証法の諸法則のすべてを具備しているのか。

弁証法の諸法則はもつとも一般的な法則であるという以上、エンゲルスの挙げている諸々の実例は弁証法の諸法則の全部を備えていると考えるのが至当だろう。

エンゲルスが弁証法の法則として掲げているものに次の四つがあつた。

A, 物質は運動する。運動は矛盾によつて起る。B, 量から質へ、質から量への転化。C, 否定の否定。D, 飛躍。

ここで、私はエンゲルスの掲げている事例が果してこの四つの法則を具備しているかどうかを検証することによつて、エンゲルの弁証法の性格を明らかにしたい。

検証を行うために〔1〕において挙げた事例を下記のようにまとめてみる。

A 運動は矛盾によつて起る。

- a 力学的運動の場合
- b 生物有機体の場合

B 量から質へ

- a 無機物の場合……水は零度で液体から固体へ……。
- b 人間事象の場合……ナポレオン

C 否定の否定

- a 数学の場合…… $a \rightarrow -a \rightarrow a^2$
- b 地質学の場合……岩層の変化
- c 生物の場合
  - $\alpha$  大麦の粒
  - $\beta$  観賞用園芸植物



- d 人間の歴史の場合……土地の共有→私的所有→高度な共有制  
 自己の労働を基礎とする私的所有→資本主義的私的所有→その否定

D 飛躍

- a 自然現象の場合……分子の物理学から原子の物理学へ。

ここで私は下記のような操作によつて、A B C Dの4つの法則が具体的例にどの程度に適合するかを調べてみる。その目的はエンゲルスによつて一般法則と名づけられているこれらの法則が、事実上「一般的」すなわち普遍的であるかどうかを調べるにある。尚この検証において、Aを除外する。何故ならば、Aすなわち「運道は矛盾によつて起る」は、問題なく一般法則であつて、凡てのケースにいわばアプリオリに妥当するとみなしてよいからである。

B (量から質への転化)を

- 1 C a (数学… $a \rightarrow -a \rightarrow a^2$ )へ……不明。
- 2 C b (地質学…岩層の変化)へ……適合しない。
- 3 C c (生物… $\alpha$ 大麦の粒)へ……適合する。  
 $\beta$  観賞用園芸作物)へ……適合しない。
- 4 C d (人間の歴史…土地の共有→私的所有→高度な共有制)へ……適合する。  
 自己の労働を基礎とする私的所有→資本主義的私的所有→その否定)へ……適合する。
- 5 D a (自然現象…分子の物理学から原子の物理学へ)へ……不明。

C (否定の否定)を

- 6 B a (無機物…水は零度で)へ……適合する。
- 7 B b (人間事象…ナポレオン)へ……適合しない。
- 8 D a (自然現象…分子の物理学から原子の物理学へ)へ……適合しない。

D (飛躍)を

- 9 B a (無機物…水は零度で)へ……適合する。
- 10 B b (人間事象…ナポレオン)へ……適合しない。
- 11 C a (数学… $a \rightarrow -a \rightarrow a^2$ )へ……適合する。
- 12 C b (地質学…岩層の変化)へ……不明。
- 13 C c (生物… $\alpha$ 大麦の粒)へ……適合する。  
 $\beta$  観賞用園芸植物)へ……適合しない。
- 14 C d (人間の歴史…土地の共有→私的所有→高度な共有別)へ……適合しない。  
 自己の労働を基礎とする私的所有→資本主義的私的所有→その否定)へ……適合しない。

(註) 「量から質へ」は「量の漸次的増大(減小)の中断による質への飛躍的移行」であるとされる。この見地から言えば、1は該当しない。

2 (岩層の変化)……は「量から質へ」の原則が働いているかどうかを確かめる手がかりがない。

3の $\alpha$ (大麦の粒)と4(土地の共有…)は「質への飛躍的移行」を厳格に適用すれば、適合するかどうか疑問の余地がある。

6(水は零度で)と7(ナポレオン)。「否定の否定」には、しばしば「高次の形態での最初への復帰」という考えが含まれている。13(土地の共有…)に関するエンゲルスの叙述に

それが現われているし、また彼が「否定の否定」の例として挙げている「ルソーの平等論」の論評の末尾に述べている文章がそれを決定的に明らかにする。その部分を要約すれば「平等は否定されて不平等となり、再び否定されて平等に転化する。けれどもこんどは、言葉は知らない原始人の自然発生的な平等ではなく、社会契約にもとづく高度の平等である。」<sup>14</sup>いま「高次の形態での原初への復帰」の原則を適用すれば「否定の否定」は6へは適合しないことになる。7（ナポレオン）はこの意味でも適合しない上に、どこが「否定の否定」であるか全然不明である。

8（分子の物理学から原子の物理学）これも同然。

14（土地の共有）この変化は飛躍によるという実証性がない。「共有から私有への転化の過程には長短さまざまな中間段階があるというエンゲルスの言葉によれば、飛躍は適合しないと見るべきである。

以上の操作によつて次のことが確められた。すなわち、B、C、D等の法則は或る事象または事象群には適合するが、他の事象または事象群には適合しない。随つて個々の事物の発展＝運動は弁証法の諸法則の全部を具備していることにはならない。このことは弁証法の諸法則は事物の発展のもつとも一般的な法則であるというエンゲルスの大前提にもとるものである。同時に〔3〕において解答を保留していた問題——動植物界、地質学、数学、歴史、哲学で行われている発展過程は果してエンゲルスの言う如く「否定の否定」の法則によつてひつくめられるか——に対する答えも与えられている。私の検証したところによればエンゲルスの断定は否定されねばならぬ。ナポレオンの例は広義の歴史的過程に入るものであるが、これには「否定の否定」は適合しない。さらにエンゲルスが「否定の否定」の例として挙げている「岩層の変化」の如きも果して「否定の否定」と言えるかどうか疑問である。少くとも「否定の否定による原初への復帰」は適合しない。観賞用園芸植物の例も同然。

このように見てくると、エンゲルスが事物の発展＝運動の一般的法則となすところのものを彼はばらばらに何の原則も統一もなく、偶々それに適合する事例を手あたり次第に持ち出していると言わざるを得ない。このことを逆に言えば彼の言う弁証法の諸法則は一般的法則などではなかつたということになる。

### 3 毛沢東の弁証法

さきに私は、エンゲルスの弁証法を客観的弁証法となすならば、マルクスとレーニンの弁証法を主体的弁証法と名づけ得ると述べた。このマルクスとレーニンの弁証法の主体性を究極にまで押し進めたのが毛沢東の矛盾論である。エンゲルスの弁証法の対極にある弁証法の見本として、ここで毛沢東の弁証法の本質を探ることにする。

毛沢東は「矛盾論」の冒頭で次のように述べている。「事物の矛盾の法則、すなわち対立物の統一の法則は、唯物弁証法のもつとも根本的な法則である。」<sup>15</sup>実際、毛沢東は矛盾の法則一つで弁証法の理論を推し進めているのであつて、エンゲルスにおいて重要な役割を荷つている「弁証法の諸法則」は全くすてられているのである。毛沢東は「矛盾論」において「矛盾の普遍性」なる概念から説き起して「矛盾の特殊性」に入つていく。ここで、私もこの順序に従つて彼の理論を跡づけることにする。

#### 〔1〕 矛盾の普遍性と特殊性

毛沢東によれば、矛盾の普遍性または絶対性という問題には二つの意味がある。その一つは矛盾がすべての事物の発展過程のうちに存在するということであり、もう一つは、すべての事

物の発展過程のうちには、始めから終りまで、矛盾の運動が存在するということである。<sup>89</sup> ここで毛沢東は「運動そのものが一つの矛盾である」というエンゲルスの言葉を引用し、さらに「エンゲルスは矛盾の普遍性を次のように説明している」と前置きして「単純な力学的運動でさえ……」の文章を反デューリング論から引用している。この引用文は第2節において論じた弁証法の法則A, B, C, Dの中のAのbに当るものである。Aは事物の運動形態の如何を問わず、あらゆる事物に普遍的に妥当するものであつた。毛沢東が、矛盾があらゆる事物の発展過程のうちに、しかもその始めから終りまで存在すると言っているのはこのことを指している。

ところで、レーニンの言うように、普遍的なものは常に個別的（特殊的）なものの中にのみ個別的なものを通じてのみ存在する。<sup>90</sup> 随つて普遍的矛盾が特殊的矛盾と並存することはあり得ない。そもそも矛盾の普遍性または絶対性とは「矛盾が普遍的・絶対的に存在すること」なのであつて、このようなものはそれ自体としてはどこにも存在しないのである。矛盾の普遍性をこのように理解するとき、われわれは「矛盾論」の中に奇異な文章を見出す。

「特殊的なものは普遍的なものと結びついて居り、また、あらゆる事物はその内部に矛盾の特殊性だけでなく、矛盾の普遍性も含み、普遍性は特殊性のうちに存在しているから、われわれが一定の事物を研究する場合には、この二つの側面およびその相互の結びつきを発見し、ある事物の内部における特殊性と普遍性との二つの側面およびその相互の結びつきを発見し、ある事物とその他多くの事物との相互の結びつきを発見しなければならない。」<sup>91</sup> この文章において明瞭に看取されるのは、特殊と普遍との並存である。この並存は、普遍を絶対的普遍と解する限り、理解し難いものである。何故ならば、絶対的普遍はあらゆる特殊の中に、いわば鑄込められたものであり、特殊の外に普遍が存在することはあり得ないからである。

この疑問は毛沢東の挙げている例によつて水解する。

その例は「レーニン主義の歴史的根源をスターリンが分析したところによると」と前提して述べられたものであるが、その骨子は次のようになる。

#### 矛盾の普遍性

レーニン主義をうみ出した国際的環境は帝国主義の諸条件の下で、資本主義の諸矛盾が極点に達したこと。これらの諸矛盾によつて、プロレタリア革命が実践課題になつた。同じく国内状況は帝政ロシアが帝国主義のあらゆる矛盾の集合点であつた。

又、ロシアのプロレタリア階級が世界の革命的プロレタリア階級の前衛となつた。

#### 矛盾の特殊性

この矛盾の普遍性のうちでロシアがプロレタリア革命の理論および戦術の策源地となつた。

この例によつて次のことが明らかになる。

(1) この「矛盾の普遍性」は矛盾の絶対的普遍性（普遍的・絶対的矛盾）ではない。何故ならば具体的（特殊的）な事物に即した特殊な矛盾だからである。(2) 然し、それは「ロシアがプロレタリア革命の理論および戦術の策源地となつた」という、より狭い範囲の出来事に較べれば比較的普遍的である。(3) この意味の普遍は特殊的（相対的）普遍と称すべきものである。(4) 随つてこの場合の普遍と特殊との関係は普遍的・絶対的矛盾と特殊的矛盾との関係ではなくて、特殊的・普遍的矛盾と特殊的矛盾との関係ということになる。

いま一つの例。

「諸事物間の範囲は非常に広大で、その発展は無限であるから、一定の場合に普遍性であるものが、他の一定の場合には特殊性に変わる。逆に、一定の場合に特殊性であるものが、他の一定の場合には普遍性に変る。資本主義制度に含まれる生産の社会化と生産手段の所有の私的性質の間の矛盾は、資本主義制度が存在し、発展しているあらゆる国に共通のものであり、資本主義に対してはこれは矛盾の普遍性である。しかし、資本主義のこの矛盾は、階級社会一般の発展の一定の歴史的段階における矛盾であり、階級社会一般における生産力と生産関係との矛盾に対しては、これは矛盾の特殊性である。」<sup>90</sup>

この文章に現われた普遍と特殊との関係を抽象的に述べれば次のようになる。

或る事物の矛盾は同じ性質のより狭い範囲の事物の矛盾に較べれば普遍であり、同じ性質のより広い範囲の事物の矛盾に較べれば特殊である。

これが普遍が特殊に変わり、特殊が普遍に変わるの意味である。ここにおいて、「普遍」が相対的・特殊的普遍であることは全く明瞭になった。

ここにおいてまた、次のことも明瞭である。すなわち、毛沢東は、特殊的矛盾と特殊的・普遍的矛盾との関係をもつて、特殊的矛盾と普遍的、絶対的矛盾との関係にすりかえている。これは、特殊の事物に関する特殊的矛盾と、あらゆる事物に普遍的な絶対的矛盾との区別に関する毛沢東の自覚の薄弱さから来ていると言わざるを得ない。

このような「すりかえ」はどういう結果をひき起すであろうか。それは、特殊的・普遍的矛盾を絶対化することにならないであろうか。否、毛沢東はその難を免れている。それは矛盾の認識が即物的・経験的になされるからである。

毛沢東によれば、矛盾の認識には二つの過程がある。一つは「特殊から一般へ」であり、他は「一般から特殊へ」である。曰く、「人類の認識の運動順序から言うと、それは常に個別のおよび特殊なことがらの認識から一般的なことがらへの認識へと一步一步、拡がって行く。人人は、常に最初に多くの異つた事物の特殊な本質を認識し、そうしてからはじめて、さらに一步進めて一般化の仕事をおこない、さまざまな事物に共通の本質を認識することが出来るようになる。すでにこの共通な事物に共通な本質を認識したのちには、この共通の本質を手引きとして、ひきつづき、まだ研究されていないか、またはまだ深く研究されていないさまざまな具体的事物についての研究をおこなつて、その特殊の本質を探し出すのである。これが特殊から一般へ、一般から特殊へである。人類の認識はすべてこのようにして、循環往復しながら進み、一步一步高められ、たえまなく深められるのである。」<sup>91</sup>

この認識法は、フランス・ペーコンの帰納法に酷似しており、絶対主義の片鱗もない。この引用文において特に注目すべきは、「具体的事物についての研究をおこなつて、その特殊な本質を探し出す」という章句である。これは特殊な事物には特殊な本質があることを示唆するものであるが、この点は次の文章にいたつて決定的に明らかである。「われわれは、物質の諸運動形態のそれぞれの大きな体系の特殊な矛盾性と、それによつて規定される本質とを研究しなければならないばかりでなく、物質のそれぞれの運動形態の発展の長い道の上にあるそれぞれの過程の特殊な矛盾および過程の本質をも研究しなければならない。すべての運動形態の現実的な、頭で作りあげたものでない発展の諸過程はすべて質的に異つている。われわれの研究活動はこの点に重きをおかなければならないし、また、この点からはじめなければならない。」<sup>92</sup>

このようにして、毛沢東は、矛盾の普遍性・絶対性から出発しながら、内容的には特殊な事物の中に存する特殊な矛盾と特殊的・普遍的矛盾を問題にしているのである。勿論それは何

人をも納得せしめる健全な方法である。

尚「矛盾論」の結論の中には次の一文がある。

「弁証法的唯物論の見地によると、矛盾は、すべての客観的事物および主観的思考の過程のうちに存在し、またすべての過程を始めから終りまでつらぬいている。これが矛盾の普遍性と絶対性である。」<sup>93</sup> この文章は「矛盾論」の冒頭にある。「事物の矛盾の法則、すなわち対立物の統一の法則は、唯物弁証法のもつとも根本的な法則である。」と呼応していることは言うまでもない。これはエンゲルスの「物質は運動する。運動は矛盾によつて起る。」に相当するものであり、随つてまたA、B、C、Dの法則の中のAに相当するものであることは既に指摘しておいた。この根本法則を普遍的・絶対的と名づけることに私はもちろん異存はない。それは最も抽象的であるが故にすべての事物に適合するからである。さきに指摘したように、毛沢東は普遍的・絶対的矛盾から出発しながら、認識においてはこの根本法則の属性たる絶対性を乱用することなく、事物の本質、即ち特殊の矛盾と真剣に取組んでいる。毛沢東における難を言えば、普遍的・絶対的矛盾と特殊の・普遍的矛盾の両概念の規定を怠つていることだけである。

毛沢東が矛盾の特殊性の認識を「矛盾論」の主眼としていることは以上によつて明らかである。然らばその認識法如何。

## 〔2〕 実践と認識との相互滲透

毛沢東は「実践論」において言う。「マルクス主義は資本主義社会の産物でしかあり得なかつた。自由競争的な資本主義時代に、マルクスは前もつて帝国主義時代に特有な諸法則を具体的に認識することは出来なかつた。」<sup>94</sup>

この文章は、認識の問題は事物に接触すること、すなわち事物の環境のなかで生活する（実践する）こと以外は解決の方法がないことを示すために述べられたものである。毛沢東は実践から離れた認識というものの不可能であることを次のように説明する。「すべての真の知識は直接的経験にその源を発している。しかし人はすべてを直接に経験することは出来ない。事実多くの知識は間接に経験されたものであつて、古代の知識や外国の知識はそうである。だから一個人の知識は、直接に経験された部分と間接に経験された部分という二つの部分から出来ている。しかも自分にとつて間接の経験であるものが、他人にとつては直接の経験である。だから、知識の全体について言うと、どんな種類の知識も直接の経験から切り離すことは出来ないのである。」<sup>95</sup>

次に毛沢東は認識の弁証法について述べる。

認識の弁証法とは現実を変革する実践にもとづいて生ずる認識の弁証法的運動であつて、それは感性的、皮相的な認識から理性的、本質的な認識へと認識が次第に深くなつていく運動である。例えば帝国主義に対する中国人民の認識において、第一段階は表面的な感性的な認識であつて、それは太平天国の運動や義和団の運動など見さかいのない排外主義的闘争にあらわれている。第二段階ではじめて理性的な認識の段階に達し、帝国主義の内部および外部のさまざまな矛盾を見ぬくとともに、帝国主義が中国の買弁階級や封建階級と結んで中国の人民大衆を圧迫し、搾取している状況を見抜くようになった。<sup>96</sup>

次に、毛沢東は、認識は実践からはじまり、実践に帰つて行くという注目すべき理論を展開する。

マルクス主義哲学が理論を重視するのはそれが行動を指導するからに外ならない。マルクス主義哲学の最も重視する点は客観的法則の認識を用いて世界を解釈することにあるのではな

く、能動的に世界を改造することにある。かくて認識は実践にはじまり、実践を経て理論的認識に達したら再び実践に帰って行く。

この実践の過程は同時に理論を点検し、これを発展させる過程でもある。理論的なものが客観的真理に一致しているかどうかという問題は、感性から理性への運動の段階では完全に解決出来るものでない。この問題を完全に解決するためには、理性的な認識を再び社会的実践のなにかにかえして、実践に応用して所期の目的を達成することが出来るかどうかを見るよりほかない。実践は理論の基準であると言われる所以である。

然らば以上の手続きによつて認識は完成するだろうか。そうではない。自然にせよ社会にせよ、これを変革する実践において、予め定めておいた理論や方針が、少しも改められずに実現される場合は非常に少い。それは実践する人が科学上技術上の諸条件によつて制限を受けているばかりでなく、客観的過程の発展およびその表現程度においても制限されているからである。随つて多くの場合失敗するのは当然である。しかし、われわれは何度も失敗をくりかえした後に、はじめて誤つた認識を改めることが出来、客観的過程の法則性と一致するところまで達することが出来る。すなわち、予想した結果を得ることが出来る。ここまで来ると或る発展過程における客観的過程についての人人の認識の運動は完成する。

しかし、過程自身も推移するという点から言えば、人人の認識の運動が完成するということはある得ない。あらゆる事物の過程は、すべて内部の矛盾と闘争によつて推移し発展するものであり、人人の認識の運動もそれにつれて推移し発展しなければならない。

観念論と機械的唯物論、日和見主義と冒険主義はいずれも主観と客観、認識と実践の分離を特徴としている。科学的な社会的実践を特徴とするマルクス・レーニン主義の認識論はこれらの誤つた思想に反対する。マルクス主義者は世界の絶対的・総体的な発展過程のうちでは、個々の具体的な過程の発展はすべて相対的であり、したがつて絶対的真理の長い流れのうちでは、個々の一定の発展段階における具体的人人の認識は相対的な真理しか持たないことを認める。<sup>87)</sup>

以上が「実践論」の要旨である。これによつてみると「実践論」の中心テーマが認識と実践との相互滲透ということにあることは一見して明らかである。そしてこの相互滲透の状況を具体的な事物の発展に即して明らかにしたのが「矛盾論、三、矛盾の特殊性」以下である。

### 〔3〕 矛盾と矛盾との相互転換

毛沢東によれば、事物の発展の或る過程の本質を明らかにするためには、その過程のうちにある諸矛盾のそれぞれの側面の特殊性を明らかにしなければならない。事物の発展のうちにある矛盾は一つあるとは限らない。そして、大きな事物であるほど、多くの矛盾を含んでいる。例えば、中国のブルジョア民主主義革命という過程のうちには、中国社会の圧迫された諸階級と帝国主義との矛盾があり、人民大衆と封建制度との矛盾があり、プロレタリア階級とブルジョア階級との矛盾があり、農民および都市ブルジョア階級とブルジョア階級との矛盾があり、反動的な支配者の諸集団の間の矛盾がある等々。<sup>88)</sup> そしてこれらの諸矛盾の一つ一つのうちにある両側面は孤立的には存在出来ないものである。ブルジョア階級がなければプロレタリア階級もなく、プロレタリア階級がなければブルジョア階級もない。帝国主義の民族的圧迫がなければ植民地および半植民地はなく、植民地および半植民地がなければ帝国主義の民族圧迫もない。矛盾の両側面は、一定の条件によつて一方では互いに対立しながら他方では連関し合い滲透しあっている。この性質が同一性と呼ばれるのである。

矛盾の双方が互いに存在の条件となっており、双方の間に同一性があるから、双方は一つの統一性のうちに共存することが出来るのである。しかし矛盾の同一性の意味はこれにつきない。矛盾の同一性においてもつと重視すべきことは、二つの側面が一定の条件によつて、それぞれ自己と反対の側面に転化することである。例えば、ソヴェトに於いて、ブルジョア階級は被支配者に転化し、プロレタリア階級は支配者に転化したように。<sup>39</sup>

さらに、複雑な事物の発展過程には、多くの矛盾が存在していることが述べられた。このような場合には、かならず一つが主要な矛盾であつて、その存在と発展によつて他の諸矛盾の存在と発展が規定され、また影響される。例えば、資本主義社会においては、プロレタリア階級とブルジョア階級という二つの矛盾する勢力が主要な矛盾であり、その他の矛盾する諸勢力、たとえば、残存する封建階級とブルジョア階級との矛盾、ブルジョア民主主義とブルジョア・ファシズムとの矛盾、帝国主義と植民地との矛盾はこの主要な矛盾によつて規定され、影響される。<sup>40</sup>

しかし、主要な矛盾と主要でない矛盾との間の関係は固定的ではない。それらは互いに転化しあい、それに従つて事物の性質も変化する。帝国主義が、中国のような植民地に対して侵略戦争をおこなつているときには、このような国の内部の各階級は一部の売国分子を除いて、すべて一時的に民族戦争をおこない、帝国主義に反対することが出来る。そのときには、帝国主義とその国との間の矛盾が主要な矛盾となり、その国の内部の各階級の間のすべての矛盾は、いずれも第二義的で従属的な地位にさがる。<sup>41</sup>

このように述べた後に、毛沢東はマルクス主義の運用に関して、極めて注目すべき発言をしている。その要旨。

主要な矛盾と主要でない矛盾との転化ということはマルクス主義そのものでも起る。マルクス主義によれば、生産力と生産関係との矛盾においては、生産力が主要なものであり、理論と実践との矛盾においては、実践が主要なものであり、経済的土台と上部構造の矛盾においては、経済的土台が主要なものである。しかし、この相互の地位は人が考えているように決して変化しないものではない。変化しないと考えるのは機械的唯物論の見解であつて、弁証法的唯物論の見解ではない。生産関係、理論、上部構造の側面も、一定の条件のもとでは、転じて、主要な決定的な働きをする。生産関係が変らなければ、生産力は発展出来ない場合には、生産関係の変化が主要な決定的な働きをする。政治、文化などの上部構造が経済的土台の発展を防いでいる場合には、政治や文化の革新が主要な決定的なものとなる。このように言うのは、唯物論に反するだろうか。そうではない。というのは、われわれは、歴史の発展の全体のうちでは、物質的なものが精神的なものを決定し、社会的存在が社会的意識を決定することを認めるが、同時にまた、精神的なものの反作用、経済的土台に対する上部構造の反作用をも認めるし、たま認めなければならないからである。これは、唯物論に反することではなく、まさに、機械的唯物論を避けて、弁証法的唯物論を堅持することである。<sup>42</sup>

下部構造と上部構造との間に交互作用のあることは、マルクス主義者によつて一般的に認められるところである。しかし、生産関係、理論、上部構造がそれぞれ生産力、実践、下部構造に対して矛盾の主要な側面をなす場合があると言い切つたマルクス主義者が、果して毛沢東以外にあるだろうか。たしかに、レーニンの中にはこのような見解を示唆する如き言葉をしばしば見出す。現に、毛沢東は「革命理論がなければ革命的運動もあり得ない」というレーニンの言葉を引用して、革命的理論の創造と提唱が、主要な決定的な働きをすと言ひ、レーニンに

自説の根拠を求めている。しかし、レーニンと雖も、「生産関係、上部構造は主要な矛盾となる場合がある」と言つた例しを私は知らない。「ある人は、ある種の矛盾は主要な矛盾と主要でない矛盾とに転化しないと考へている」と毛沢東は言う。この「ある人」はもちろん彼の戦友たる同志を指すものであろう。しかし、この「ある人」は彼の思想上のあるいは実践上の先輩のうちの或る人たちであつても少しも差支えないであらう。

ともあれ、このような断乎たる発言が、彼の久しきにわたる実践活動のまにまに体得され理論の帰結としてなされたものであることは言うまでもあるまい。そしてこの発言が切実な要求によつてなされたものであることは「実践論」と「矛盾論」を一読すれば明らかである。

#### 〔4〕 説得の弁証法

要求とは何か。教条主義、経験主義、日和見主義、冒険主義に対する戒めの必要がこれである。

毛沢東は矛盾論の最後に述べている。「もしわれわれが研究を通じて、上述の諸要点をほんとうに理解するならば、われわれは、マルクス・レーニン主義の基本原則にそむく所のわれわれの革命の事業に有害な教条主義的な諸思想をうちやぶることが出来、また、経験ある同志たちが、自己の経験を整理し、それに原則を与えて、経験主義的な誤りをくりかえすことのないようにさせることが出来るであらう。それが矛盾の法則を研究したわれわれの簡単な結論である。」 また実践論のなかでは、情勢の変化の極めて急速な革命の時期において、もし革命党員の認識がそれに応じて変化することが出来なければ革命を勝利に導くことは出来ないことを指摘し、かつ認識が客観的事態の発展に副い得ない理由は認識の被制約性すなわち、それが社会的条件によつて制限されていることであるとなして日和見主義者と冒険主義者に次のような警告を発する。

われわれは革命の隊伍のなかの頑固派に反対する。彼等の思想は変化した客観状勢とともに前進することが出来ないものであり、それは右翼日和見主義として現われた。これらの人人は、矛盾の闘争がすでに客観的過程を前進させていることを見る事が出来ず、彼等の認識はあいかわらず古い段階に立ちとどまつているのである。……

われわれはまた「左翼」空論主義者にも反対する。彼等の思想は、客観的過程の一定の発展段階をとびこえており、あるものは幻想を真理とみなし、あるものは将来にしか実現の可能性のない理想をむりやりに今すぐ実現しようとし、大多数の人人の当面の実践から離れ、行動の上では冒険主義としてあらわれる。<sup>43</sup>

「質的に違つた矛盾は質的に違つた方法で解決される」この原則を毛沢東は教条主義者に理解させたいのである。だから彼は、歎息して言う。異つた方法によつて異つた矛盾を解決すること、それはマルクス・レーニン主義の厳格に守らなければならない一つの原則である。教条主義者はこの原則を守らない。かれらは、さまざまな革命の情勢のちがいを理解せず、したがつてまた、異つた方法によつて異つた矛盾を解決しなければならないということを理解しない。そして改めてならないと思つている公式を、千篇一律にどこでも使用する。このような仕方は革命を挫折させるか、またはもともと うまくいつていたことをだいなしにするだけである。<sup>44</sup>

毛沢東の説得は続く。

われわれ中国革命にたずさわるものは、諸矛盾の特殊性を、全体として、すなわち諸矛盾のつながりにおいて、理解しなければならないばかりでなく、また、矛盾のそれぞれの側面から



も研究して、はじめて全体を理解することが出来るのである。諸矛盾のそれぞれの側面を理解することは、次の諸点、すなわち諸矛盾の各側面がそれぞれどんな特定の位置を占めているか、各側面がどんな具体的な形式でその対立した側面と依存しあいかつ矛盾しあう関係をうんでいるか、そして相互依存および相互矛盾のうちにあるあいだ、および依存関係が破れたのち、それぞれどんな具体的方法でその対立物と闘争するかを理解することである。これらの問題の研究は非常に重要である。レーニンがマルクス主義のもつとも本質的なもの、マルクス主義の生きた魂は、具体的な状況を具体的に分析することにあると言っているのは、この意味である。わが教条主義者たちは、レーニンの指示にそむいており、なんらかの事物を具体的に分析することに頭をつかつたことがなく、文章を書くにも演説するにも、つねにからつぽな「八股調」をならべるだけであり、わが党内に極めてわるい作風をつくりだした。

問題を研究するのに、主観性、一面性、表面性をおびることを戒めなければならない。主観性とは、問題を客観的に見ることを知らないこと、すなわち唯物論的見地にたつて問題を見ることを知らないことである。例えば中国のことだけ知つて日本のことを知らないこと、共産党のことだけ知つて国民党のことを知らないこと、……有利な状況という面だけ知つて困難な状況という面を知らないこと、……欠陥の面だけ知つて成果の面を知らないこと、原告のことだけを知つて被告のことを知らないことなどである。孫子は軍事を論じて、「彼を知り、己れを知れば、百戦するもあやうからず」と言っている。……「水滸伝」では、宋江が三たび祝家荘を攻撃するが、その最初の二回は、状況が不明のうえ、方法もまちがっていたので敗北した。その後、方法を変え、状況の調査から始めたので、盤陀路に精通するようになり、李家荘、扈家荘、祝家荘の同盟を瓦解させ、また、外国の物語にでてくる木馬の計に似た方法を用いて伏兵を敵の陣営内に配置し、第三回目には勝利を得た。「水滸伝」には唯物弁証法の実例がたくさんあるが、この祝家荘の三回の戦いは、そのうちでも、もつともよい例の一つであろう。<sup>(4)</sup>

#### 〔5〕 覚え書き

毛沢東の言おうとすることは要するに、事物の表裏全体をよく調べ、事態の進行に即応した対策を立てて事に当れ、という教えである。これだけのことならば何も弁証法の理論を借りなければならぬわけのものでもあるまい。太平洋戦争の末期に、われわれは希望的観測を戒める言葉をよく耳にしたものである。希望的観測とは有利な面だけを挙げて不利な面に眼を蔽うことである。矛盾とは、精神分析家のよく言う葛藤に当る。葛藤が己れの中にある場合には、葛藤する諸因子を究めることが先決だ。己れと人との間の葛藤は己れの立場を知るのみでは解決出来ない。敵の状況に精通するのが将たるものの重要な資格であることは「水滸伝」の物語を待つまでもなく明らかであり、峻岳の頂をきわめようとする者は、一步退いて先ず山の相に眼をこらす。夫婦の間に葛藤のあるときは、夫は妻のヒステリーの因つて起つた源に思いをいたす必要があり、妻は夫の不満の因つて来たとくろに無理解であつてはなるまい。毛沢東は実践論の中で、「認識は実践にもとづいて浅いものから深いものへ進むというのが弁証法的唯物論の理論であるが、このような解決は、マルクス主義以前には、だれによつても与えられなかつたものである」と言っている。<sup>(4)</sup> 果してそうだろうか。なるほど一貫した理論としては与えられなかつたかも知れないが、経験家と言われる人ならば深淺広狭の別はあるにしても、誰でも体得していることであり、また断片的にせよ古くから文字にもなつたことは誰よりも毛沢東自身が述べていることである。

毛沢東の弁証法の急所は「実践態度」にあると言える。それが彼の理論のモチーフであり、

また帰結でもある。彼の理論を一言以つて蔽えば、諸事物の特殊な本質を特殊な矛盾として捕え、特殊な方法を以つて解決するということに尽きる。随つて毛沢東が法則について語る場合、その法則は特殊な事物を支配する特殊な法則であつて、「否定の否定」や「量から質への転化」の如きいわゆる弁証法の諸法則ではない。等しく自然現象の諸領域の研究法を説明するにも、毛沢東の態度はエンゲルスのそれとは根本的に異なる。毛沢東は言う。「科学的研究の区分は、それぞれの科学の対象が持つている特殊な方面に基づいている。だから、諸現象のある領域に特有な一定の矛盾の研究が、科学のある部門の対象をなしている。たとえば、数学における正数と負数、力学における作用と反作用、物理学における陰電気と陽電気、化学における分解と化合、社会科学における生産力と生産関係、階級と階級闘争、軍事科学における攻撃と防禦、哲学における観念論と唯物論、形而上学的観点と弁証法的観点等々はすべて特殊な矛盾と特殊な本質を持つており、そのために異つた科学的研究の対象を構成しているのである。<sup>47)</sup>

このように、毛沢東の研究態度には、与えられた法則を事物の見境もなく一様に押しつけるふうは微塵も見られない。「反デューリング論」や「自然弁証法」のなかには、上掲の毛沢東の文章に見られるような、諸事物を正と反との対立において並立した文章を無数に見出す。一見すると、上掲の毛沢東の記述法と類似した記述法でありながら、エンゲルスの意味づけ方は毛沢東のそれとの間には非常な相違がある。エンゲルスでは、彼の手にする法則が、諸事物の差違性を超えて妥当するという前提の下に記述されているのであるが、毛沢東では、諸事物における「正」と「反」とはそれぞれの事物の特質に応じた特殊の対立をなしているのである。

#### 4 諸家の弁証法の特徴について

弁証法を客観的弁証法と主体的弁証法とに大別することが許されるならば、エンゲルスの弁証法は前者に属し、毛沢東の弁証法は後者に入る。しかし、このような区分の仕方には釈明を必要とする。エンゲルスの弁証法にも主体的契機がないとは言えないし、毛沢東の弁証法でも客観的契機は無視されていないからである。毛沢東が、弁証法を事物の本質における矛盾の研究というとき、この事物とはまさに客観そのものである。

それにもかかわらず、エンゲルスの弁証法を客観的弁証法と言える所以は、エンゲルス自身が述べているように、主観はたかだか客観の反映に過ぎず、自然ならびに人間社会の歴史的発展と思维そのものは主観から独立の弁証法的諸法則が作用しているとなしているからである。

毛沢東の弁証法においては、客体は定立されるにしても、その認識は現実を変革する実践にもとづいて生ずる弁証法的認識である。したがつて、客観は主体の認識ならびに実践活動とのかかわりにおいてのみ存立するのである。このように、主体的契機に重点がかかっているという意味で、これを主体的弁証法と名づけてよいと思う。

弁証法を客観的と主体的とに大別するとき、傾向としてスターリンは前者に属し、マルクスとレーニンに後者に属すると言える。以下これらの諸家の弁証法の特徴を述べることにする。先ずレーニンから。

##### 〔1〕 レーニンの弁証法

レーニンの立場が毛沢東のそれに極めて近いことはすでに述べた。レーニンは「哲学ノート」の中で言っている。「弁証法とは、対象の本質そのものにおける矛盾の研究である。」また次のようにも言っている。「弁証法は、いかにして対立が同一でありうるか、またいかにして

同一であるか（いかにして同一となるか）——この対立はいかなる条件のもとで同一であり、そして相互に転化するか、——なぜ人間の知性は、これらの対立を死んだ、凝固したものとしてではなしに、生きた、可動的な、相互に転化しあうものとしてとりあげねばならぬかということに関する学である。」

これらの言葉を通じて見られる、弁証法に関するレーニンの見解は反映論でもなければ客観弁証法でもない。

ところが、レーニンが下記に示すように反映論の立場をとっている事実をどう説明するか。「問題を、唯一の正しい見地、即ち弁証法的唯物論的な見地から提起するには、こう問うべきだ。電子・エーテル等々は、人間の意識の外に、客観的実在として存在するか、否か？と。この問いに対してなら、自然科学者は躊躇なく然りと答へるに相違ないし、また絶えず然りと答えている。恰かも、人間以前、有機的物質以前における自然の存在を躊躇なく認めるのと同様に。そしてこのことによつて問題は唯物論に有利に解決される。なぜなら物質の概念は、既に述べたように、認識論的には、人間の意識とは独立に存在する、そして意識によつて反映される、客観的実在よりほか何も意味しないから。」<sup>(48)</sup>

先ず問わねばならぬのは、どういう経緯からレーニンがこのような発言をしたかということである。それについてはレーニンの次の文章が端的に事情を明らかにする。「最も徹底的な、最も明白なマツハ主義者の一人、カール・ピアソンを例にとつてみよう。……重要なのはピアソンの観念論的見地は、「物体」を感官知覚と見做しているという点だ……。」<sup>(49)</sup>

これによつてレーニンが上掲の発言をした理由が明瞭である。即ちこの発言は、マツハ流の主観的観念論——不可知論に対抗してなされたものなのである。不可知論は物質の存在を感覚に帰して、その客観的実在性を否定する。唯物論者ならずともこのような見解を承認するわけには行くまい。物質は実在する。そして何らかの仕方で意識に反映する——これがレーニンの主張なのである。

ここまで来るとレーニンの反映論の性格は明らかである。それは物体（物質）と意識との関係という一定の範囲内でのみの出来事なのである。若し然らば、レーニンは反映論を以つて弁証法的唯物論の中心に据えているとは限らないし、また実際そうしていない。レーニンの反映論と前述の彼の、弁証法に関する定義とは何の齟齬もなく両立し得る。レーニンは「唯物論と経験批判論」のなかで、しばしばエンゲルスの「自然弁証法」に同調した発言をなしている。然し全幅的に賛意を表していないことは「弁証法の問題に寄せて」の中の遠慮深い発言において明瞭である。「弁証法の内容のこの方面の正しさは、科学の歴史の手で試験されなければならぬ。弁証法のこの方面は、普通に（たとえばブレハーノフの場合）さして注意が払われていない、——対立物の同一性が事例の総和と解されて（「たとえば種子」，「たとえば原始共産主義」，——これはエンゲルスもやっているが、通俗化のためだ），認識の法則とは解されていない。」<sup>(50)</sup>

つぎに、毛沢東の弁証法において見たように、主体的弁証法には、認識の手続きにおける個別優先の思想がある。レーニンもこの例に洩れない。

「個別的なものは普遍的なものである。なぜなら、眼に見える家以外に家一般があるとは考えられないからである。個別的なものは普遍的なものにいたる連関のなか以外には考えられない。①普遍的なものは個別的なもののなかのみ、個別的なものを通じてのみ存在する。すべて個別的なものは（どうにかして）普遍的なものである。すべて普遍的なものは、個別的な

の一部分、又は一側面、又は本質である。(2)すべて普遍的なものは、すべての個別的な対象を近似的にのみ包括する。』<sup>50)</sup>

下線(1)の部分において、個別的なものは具体的事物を指し、普遍的なものは事物を包摂する概念を指す。矛盾ということにあてはめてみれば、事物の個別的矛盾の中にのみ普遍的矛盾は存する。然るに、事物の個別的な矛盾は種々の要素から成っているから一つの普遍的矛盾によつて律することが出来ない。そこで、この趣旨で下線(2)を解釈すれば、普遍的矛盾は事物の個別的矛盾の一部分の本質をなすということになる。だから事物の本質を探るには先ずその個別的な矛盾の性質に着眼し、如何なる本質が宿っているかを究明しなければならぬということになる。このことは認識の手続きにおいて、個別は普遍に優先することを示すものである。もちろん、この場合にも矛盾一般の絶対性は前提されているのであるが、弁証法の諸法則を具体的事物に押しつけるという態度は少しも見られない。

## 〔2〕 スターリンの弁証法

スターリンの弁証法にはたてまえとしては客観的弁証法と主体的弁証法との両側面がある。彼の言う弁証法的方法とは弁証法的な「物の見方」の意味である。この限りにおいて主体的立場に立っていると言える。然るに一方、彼はエンゲルスと同様に弁証法の法則を立てて事実上これを絶対化している。彼は弁証法的方法を特徴づける根本特徴として次の四つを挙げている。

- (1) 自然を互いに有機的に関連し、依存し、制約する事物の統一ある全体と見る。
- (2) 自然を不断の更新と発展の状態と見る。
- (3) 事物の発展過程を、かくれた量的変化から明白な質的变化へ移行する発展、すなわち漸次的な量的変化から質的变化へ飛躍的に移行する発展と見る。
- (4) 低いものから高いものへの発展過程は、物や現象へつきものの矛盾の発現と見る。<sup>51)</sup>

この四つの根本特徴はエンゲルスの弁証法の諸法則と原則的に変らない。そして、エンゲルスの場合と同様にスターリンが客観弁証法の立場をとっていることは、次のように書いてエンゲルスに同調していることでも分る。「量的変化から質的变化への移行としての弁証法的発展を特徴づけて、エンゲルスはつぎのように言っている。『……こうして、各液体には所与の圧力のもとに——当該温度をつくりだす手段がある限りでは——一定の氷点と沸点があり、こうして最後に、各気体もまた圧力と冷却がこの気体を液体にするそれぞれの臨界点を持つのである。』」<sup>52)</sup>

この四つの根本特徴のうち、(1)と(2)と(4)は絶対的普遍とされてよいものであり、(3)は特殊的普遍すなわちある特殊な事物にのみ普遍的に適合するものである。(3)すなわち「量から質への飛躍的移行」が絶対化されるとき、自然と社会を通じて諸現象を十把一からげにしてこの原則で割り切ってしまうことになる。何故に絶対化していると言うか。それはスターリンの表現の仕方が断定的だからである。さらに、スターリンによれば弁証法的唯物論は世界観である。スターリンは言う。「弁証法的唯物論はマルクスレーニン主義党の世界観である。それが弁証法的唯物論と呼ばれるのは、この世界観の、自然現象の取扱い、自然現象の研究、これらの現象の認識方法が弁証法的であり、またこの世界観による自然現象の解釈、自然現象の理解、その理論が、唯物論的だからである。」<sup>53)</sup> 世界観であれば普遍(全体)が個別に優先するのは自然のなりゆきである。個別すなわち特殊から普遍に進むのではなく、先ず普遍をたてて特殊に及ぶ。普遍が絶対化される所以である。その結果は次のような主張に現われる。「資本主義

から社会主義の移行や資本主義の圧迫からの労働者階級の解放は、徐々の変化によつてではなく、すなわち改良手段によつてではなくて、資本主義制度の質的变化によつて、すなわち革命によつてのみ、実現出来るのである。<sup>54)</sup>

これはマルクス主義の根本テーゼとも言うべきものであり、マルクスの暴力革命説を受けついでいるものであるから、マルクス主義者たるものがこのような発言をなすこと自体には何の不思議もない。しかし、同じ内容の発言をするにしても、特殊な事物に、それに即応した特殊な方法で分析を加え、それから得た結論として発言するのと、予め用意した原則を千遍一律に事物にあてはめることによつて得た結論を発言するのでは雲泥の相違がある。少くともわれわれはこのような操作に「科学的」の實辞を附することを躊躇せざるを得ない。量から質への転化が飛躍によるかどうかは個々の事物の性質によるものであることはすでに私の明らかにしたところである。飛躍は量から質への結節点における一回的な飛躍でなければならぬ。中間段階のない移行でなければならぬ。然るに、すでに指摘した如く「土地の共有からその私的所有へ、私的所有から高度の共有性へ」において、共有から私有への転化の過程には、「長短さまざまな中間階級がある」とエンゲルス自身が言っている。随つて、ここには飛躍のないことが明らかである。封建社会から資本主義社会への移行が全面的に急激な飛躍によつて行われた場合は、例外的に存するだけだ。フランスでは市民社会へ移行が革命によつて行われた。然らばイギリスではどうか。ここでは市民社会への移行は少くとも2回にわたる部分的、中間的な革命を経て、いわばなしくずし的に行なわれた。他の資本主義国家においては、移行が全面的に飛躍によつて行われたことを示すような歴史的事件は見当らぬ。

### 〔3〕 マルクスの弁証法

マルクスの弁証法の核心と思われるものはすでに述べたから、ここでは彼の弁証法の特徴を側面からながめることにする。

マルクスの弁証法には巨視観に立つ場合と微視観に立つ場合との二つの方面がある。巨視観に立つ場合とは、例えば唯物史観がそれであり、社会的なものの動向が精密科学の手法を以つて計数的に示されるのでなくて、或る傾向として蓋然的に示される場合がこれである。また例えば歴史上の社会変遷の跡に「否定の否定の法則」をあてはめて、その各段階を特徴づけている場合がこれである。その例。社会の発展過程は、「人間の局限された関係が彼等相互の局限された関係を制約し、そして彼等相互の間の局限された関係が彼等の自然に対する局限された関係を制約している段階」にはじまり、「分業の発生とともに私有財産が生まれ、資本主義の発生を見る段階」へと進み、ついに「資本主義の中にある三つの契機——生産力、社会状態および意識が互いに矛盾に陥り、ここに分業が廃止され、私有財産の止揚される段階」に帰着する。<sup>55)</sup>

このような社会発展の様態は、資本主義の場合を別にすれば、発展の各段階に否定的契機が含まれているとしても、これを微視的に分析し、把握する手がかりはない。随つてその事態の叙述はいわば鳥瞰的・巨視的な観点に立つ外ない。

微視的な場合は「資本論」がその典型である。「資本論」では、無数のデータを計数的・科学的に処理することによつて、資本の動向の必然性が実証されている。すなわち、諸資本の集中されていく過程が、労働時間と賃金との関係から明らかにされている如きはその一例である。<sup>56)</sup>このようにして、マルクスは精密科学の手法を用いて、量の変化がある一定点に達すると質的变化にかかわることを実証的に結論づけている。

しばしば述べたように、マルクスは当時の「資本主義の動向という具体的な事物」を科学的に分析した結果、そこに弁証法の諸法則の現われていることを確めたのである。ここにわれわれは、マルクスが「彼の時代の資本主義の動向」という特殊な対象を取り扱ったという事実を看過してはならないと思う。「資本論」以後、資本主義は帝国主義の時期を経ている。この期間に資本主義は、或る面ではマルクスの予言した通りの道をたどり、また或る面では予期しなかつた様相を示し、かつマルクス主義の定式と異つた変革が相ついで起つた。ロシアや中国における革命はその最も著しいものである。

### 5 断絶観を支えているもの

断絶観を支えているもの、すなわち弁証法の、問題点を探求するのが本章の目的であつた。私の研究の結論は次のように要約することが出来る。

エンゲルスとスターリンの客観的弁証法では弁証法の法則が事実上、絶対化されている。このことに関連して最も印象的な文章を再度エンゲルスの自然弁証法から引用してみる。

「量から質への、またその逆の転化の法則、

対立物の浸透の法則、

否定の否定の法則、

この三法則はすべて、ヘーゲルによつて、彼の観念的なしかたで、たんなる思惟法則として展開された。……誤謬は、これらの法則が思惟法則として自然ならびに歴史に強制されていて後者からみちびき出されていない点にある……。」

ヘーゲルに対するエンゲルスの批判は、エンゲルスに対してなした私の批判そのままである。エンゲルスは、ヘーゲルが観念論者の故に事物に法則を押しつけているとなすのであるが、唯物論者と雖も、この誤りを冒さないとは限らない。それは、現にエンゲルスがやつているように、彼らが事物から得た特殊の法則を一般化し、絶対化する場合である。

上掲の引用文の後に次のような文章がある。「量から質への転化とその逆の転化に関する法則。……自然においては質的変化はただ物質または運動の量的増加か量的減少かによつてのみおこりうる。……自然、社会、思惟の一般法則が、はじめてその一般的に妥当する形式でのべられたこと、このことはしかし、つねに世界史的事業としてのこるものである。」<sup>64</sup>

なるほどエンゲルスの言うように、この法則は自然の発展には適合するだろう。しかしこれを社会事象に拡張するときたちまち牽強附会におちいることは、私の検証したところによつて明らかである。

エンゲルスは事実上、弁証法の法則を普遍化し、絶対化している。スターリンも同然。

次に、毛沢東やレーニンの主体的弁証法において、弁証法の諸法則が切り棄てられた理由として次のことが考えられる。何よりも、彼等は革命の第一線に立つた人人である。革命の実践には、その時代の客観状況に適合した理論をうみ出す外ない。既に述べたように、マルクスの「資本論」の理論は資本主義の動向を探る上の模範にはなり得ても、もはやそのままでは現代に通用しないのである。

現代の資本主義の動向は、一つの流れとして巨視的に見るならばいざしらず、これを徹視的科学的にとらえるには、計上すべき諸要素が余りに錯綜している。否、或る立場をとれば、科学的なアプローチを許さないとは言えぬだろう。然し、今われわれの問題にしているのは、資本主義から社会主義への結節点を、マルクスが行つたのと同様な手法を以つて、厳密に確定することが出来るか、端的に言えば、革命の時期を科学的に算定することが出来るか、というこ

とにある。そもそもそういう結節点というものが存在するのか、ということである。若し、かかる科学があるとなす者があるならば、私は、それを見ずから前に、そういう科学こそ最も非科学的科学であると断じてはばからない。わけても革命前の中国の如く、内外の諸矛盾の重畳していた社会にあつては「資本論」に準じた手法による「資本主義の秘密の暴露」という如きことは不可能であり、また可能であつたにしても問題の解決にはならない。毛沢東に課せられた仕事が諸矛盾の整理に限られざるを得なかつたのは当然である。ここまで来てマルクスの弁証法と毛沢東の弁証法との異同はおのずから明らかである。マルクスは弁証法の諸法則を資本主義の動向の中に確認し得る限りにおいて、その客観性を認めた。毛沢東にはかかるものを自ら科学的に確認するための資料が欠けている。また確認する必要にも迫られていない。彼の必要としたのは、彼の当面した特殊な客観的事態の持つ特殊な諸矛盾を追及することである。毛沢東がマルクスの弁証法から継承したものは矛盾の相において事物を観察すること、事物の発展における対立する諸契機を全体との連関において把握すること、および革命実践の三つである。客観的普遍的な法則の棄てられた所以である。

法則が棄てられるとすれば、たのむは主体者の知恵と力量のみである。さきに私は毛沢東の理論の急所を「諸事物の特殊な本質を特殊な矛盾として捕え、特殊な方法を以つて解決すること」となしたが、このようなことを実践する方法として毛沢東の勧告しているのは、諸矛盾の大小、軽重を商量しつつ、しかも全体との関連において捕えよ、事物の表裏全体に眼を注ぎ、事態の進行に即応した方策を立てよ、という如きものであつた。これは所詮、実践の心得、生活の知恵と言うべきものであつて、このようなものを弁証法となしてよいかどうか疑問である。強いて弁証法という名に関連づけるとしても、たかだか弁証法的な物の見方という以上には出ない。

次に私はマルクス主義の科学性ということを問題にしたいと思う。マルクス主義は科学であるとはしばしば耳にする言葉である。エンゲルスは「空想と科学」に、唯物史観と剰余価値説による資本主義的生産の秘密の暴露によつて社会主義は一つの科学となつたと記している。<sup>64</sup>

この文章において、社会主義を科学たらしめるものが唯物史観と剰余価値説である以上、この二つが科学でなければならない。ところで、唯物史観と剰余価値説とを同列にして科学となすことが出来るであらうか。

前に述べたように、剰余価値説を科学とすることには問題がない。然るに唯物史観は言わば一つの世界観である。それには科学に必要な方法が欠けている。或る程度の実証性はあるにしても、科学たるに必須の精密性を欠いている。このようなものを科学となすことは出来ない。ところが、このことを認め、かつ表明しているのは外ならぬエンゲルス自身なのである。「空想より科学へ」の第一版、序文の中に曰く。「科学的社會主義の發生のためには、一方ではドイツの弁証法が不可欠であるが、他方ではイギリスやフランスの發展した經濟的・政治的條件も不可欠であつた。40年代の初、ドイツの經濟的・政治的發展段階は今日に比しても遙かに後れていたから、その段階ではせいぜい社會主義の戯画が生まれ得るに過ぎなかつた。イギリスやフランスで出来た經濟的・政治的状態がドイツの弁証法的批判に投ぜられた時、はじめてそこに、眞實の結果が得られたのである。従つてこの方面から見れば、科学的社會主義はドイツのみの産物ではなくて、むしろ國際的産物といわなくてはならぬ。」

ここで、イギリスやフランスで出来た經濟的・政治的状態が科学的社會主義の發生のための不可欠の條件をなした理由は、それが科学的操作にたえるだけの法則性を示す段階に達していた

からであるに相違ない。してみると、社会主義を科学たらしめるには、対象を科学的に——計数的に把握することが必須の要件とならなければならない。社会変遷の各段階の歴史的跡づけや唯物史観を確立するには、イギリスやフランスで出来た経済的政治的状态を待つ必要はなかったはずだ。これは巨視的な方法で十分間に合うから。仮りに、これらのものにも法則性があるから科学であると主張するとすれば、この意味の「科学」と剰余価値説の「科学」とを厳密に区別して用いる必要がある。そうでなければ、理論を曖昧にし、紛糾させる。<sup>(6)</sup>

紛糾はスターリンが次のように述べるとき、表面化する。

「社会生活のあらゆる複雑性にもかかわらず、社会史に関する科学は例えば生物学のように、正確な科学となることが出来、そしてその科学は社会発展の法則を実践的適用のために利用することが出来る。」<sup>(7)</sup>

この短い文章は二つの問題を含んでいる。(1) 社会史に関する科学は果して生物学と同じように正確な科学となることが出来るか。それが生物学と比較され得るような科学たるためには、歴史を推進させるあらゆる要素と要素との間の力関係を厳密に計量することが最少限度必要であろう。もちろん、このような要素には社会に固有なものもあれば、偶然的、外在的のものもあるはずである。このような計量は人力の及ぶところでない。

(2) そこで一步譲つて、社会史に関する科学がスターリンのいわゆる「社会発展の法則」を明らかにするとしよう。ここに社会発展の法則とは、例えば「生産手段の共有」から「私的私有」へ、「私的私有」から「共有」へ、の如きものであるに相違ない。ところで、この発展の各段階の間には、大小さまざまな中間段階があつて、一つの段階から次の段階への移行に結節点の認められないことは既に明らかにした通りである。

このような事態を「実践」と結びつけて考えればどうということになるか。

上述のように、社会発展の一つの段階から次の段階への移行が漸進的なものであるとすれば、推進のための実践運動も漸進的なものでなければならないことになる。

然るに、スターリンの言う「実践」とは、言うまでもなく一定の結節点におけるプロレタリアートの実践であつて、急激な社会変革を目ざす所の暴力革命なのである。この論理上の喰い違いはどこから来るか。

それは、「科学」の用法の曖昧さに基づくことは明らかである。しばしば述べたように、「資本論」の「科学」のように、一つの「事物」に分析を加え、それに固有の法則を導き出す行き方ならば、その科学的操作に誤りのない限り、その結果得られた結節点は客観性を持つであろう。随つて革命実践の時期も客観性を持つことになる。これが科学と実践との眞の意味のつながりでなければならぬ。然るにマルクス主義の「社会発展の法則」の理論ではこのような結節点を導き出すことは不可能であるのみでなく、結節点の出現を否定する結果にもおちいりかねない。それにもかかわらず、彼が暴力革命を主張する矛盾をおかしているのは、彼が巨視的な法則性を微視的な合法則性にすりかえているために外ならぬ。

一体マルクス主義の革命実践の理論には二つの解釈を許す余地がある。その一つは、資本主義社会の動向を分析して、資本主義と社会主義との間の結節点を確定する行き方であり、他は、理論と実践との統一を大前提として、革命の実践を主張する行き方がこれである。マルクス主義の精神は客観的法則の認識を用いて世界を解釈することにあるのではなく、能動的に世界を改造することにあると言う場合が後者に当る。もちろんこの場合にも、認識は重要であり、それ故にこそ理論と実践との統一が要求されるわけであるが、主眼点はどこまでも実践に



あつて認識は従である。

さて第一の場合について言えば、マルクスが試みた、微視的・分析的方法による革命実践の時期の確定は今日ではもはや通用しない。そこで自ら第二の場合、すなわち実践第一主義とも言うべきものにおちつかざるを得ない。毛沢東の実践理論がその典型的のものである。ここでも、もちろん認識は重要視されているのであるが、この「認識」の対象は資本主義経済の動向の「科学的な合法則性」ではない。「認識」は実践者の知恵に訴えて諸々の矛盾の緩急軽重を比較考量して実践の方法を確定するといったものである。それは科学的な態度ではあつても、科学そのものではない。

#### 〔4〕 要 約

断絶観を支えるものは弁証法である。そこで、私は弁証法の核心と思われるものを探求した結果、次の結論を得た。

(1) エンゲルスとスターリンの客観弁証法は、弁証法的法則を事物に無差別的に押しつけるという根本的な誤りを冒している。しかも、社会の発展において現われる断絶の理論はこの誤った弁証法を直接の基盤としているのである。

(2) 毛沢東とレーニンの主体的弁証法の核心は、刻々眼前に展開する客観的事態に如何に対応するか、に関する実践指導の理論である。仮り法則性と科学性が弁証法の不可欠の要件とされるならば、それは弁証法ではない。また、仮りに法則性と科学性が要件とされないとすれば事物を矛盾の相においてながめることを別にすれば、事物の表裏や諸事物間の軽重先後を見極めた上で実践に移るという高い知恵との区別を放棄しなければならない。

(3) マルクスの科学的弁証法の産物をそのまま今日の事態に適用することは出来ないし、またそれを範型として、新しい「資本論」を書く道は閉ざされている。

かくて断絶観を一般化する根拠は薄弱である。

## V 結 論

マルクスは言う。「共産主義はわれわれにとつて、作り出さるべき一つの状態、現実がそれに則るべきひとつの理想ではない。われわれは今の状態を止揚する現実的な運動を共産主義と呼ぶ。」(ドイッチェ・イデオロギー) このような運動を主眼とする主義の下に生まれた世界観が闘争と矛盾とをモチーフとして形成せられるのは当然である。レーニンは言う。「対立の統一(合致、同一性、均勢)は、条件的、一時的、暫時的、相対的だ。相互に相容れない闘争は絶対的だ。発展、運動が絶対的であるように。」<sup>(1)</sup>

世界をこのように闘争と矛盾の面に圧倒的に重点をおいてながめるのは公平であるだろうか。仮りにエンゲルスの言うように、「生命も諸事物と諸過程そのものの中に存する、たえず自己を定立しかつ解決する矛盾である」としたところで、その反面に、個体と環境との間に、個体と個体との間に、また個体内部の組織と組織との間に調和と統一が欠ければ一瞬間もながらえることの出来ないのも事実だ。人という生命体は酸素を吸つて血液の浄化をするように作られている。若し呼吸作用と大気中の酸素の存在ということとの間に矛盾が生じたとすればどうだろう。母体は妊娠し、出産の近づくにつれて乳腺が著しく発達し、やがて出産とともに生まれる子に母乳を授けるように作られている。このような、生命の維持や創造の自然的活動の中にも、強いて探せば矛盾と称すべき要素も見出せないことはないだろう。然し少くとも矛

盾、対立というよりは調和、統一と見る方が分りがよい。皮膚神経は温、冷、痛の刺激を感じるによつて身体を保護し、嗅覚は有害な物質を識別し、その体内に入るのを予防する役割を持つ。これも調和だ。肺臓に侵入した結核菌は白血球の攻撃を受ける。ここに血を流さない死闘が展開する。若しこの戦いを顕微鏡的視野の出来事として観察すれば、まさに闘争であり矛盾である。然し、試みに活眼を開いて大局的に眺むればこの上もない調和である。生命は、侵入したバクテリアに抵抗すべく、その白血球をしてこれと戦わしめるように作られているのだ。

ベルグソンによれば、眼の如き器官において驚くべきことが二つある。即ち、その組織の複雑さと機能の単純さである。眼は鞏膜、角膜、網膜、水晶体などの相異なる部分からなる。それらの一つ一つの部分についても、その細密さは無限である。網膜だけについても、それは多極性細胞、二極性細胞、視細胞という三層の相異つた神経組織から成ることを知る。しかも、その細胞は個性を持ち、疑いもなく極めて複雑な有機体を構成している。更に細胞の組織については簡単に言いあらわせるものではない。されば、眼の機構はすべて極度に複雑な機構が無限に集まつている。しかも視力は単純な事実で、眼を開きさえすればたちまち働く。まさにその機能が単純なる故に、こうした無限に複雑な機構の形成にいささかでも自然の手落があれば、視力は不能になつてしまうだろう。<sup>(2)</sup>

ここには眼を構成する諸器官相互の間に、また一つの器官を構成する諸細胞の間に、さらには細胞の内部機構の中に絶対に矛盾があつてはならないことが言われている。

このように見てくると、闘争と矛盾は絶対的、統一と均整は暫時的、相対的と決めてかかるわけにはゆくまい。エンゲルスもまた、このことを気づいていなかったわけではないと思われるふしがある。自然弁証法の中に曰く。「遺伝を肯定的・保存的側面、適応を否定的な、遺伝されたものをたえず破壊する側面と考えることができるが、また同様に適応を創造的・能動的・肯定的活動、遺伝を阻止的・受動的・否定的活動と考えることも出来る。しかし歴史においては進歩が現存事物の否定として現われるように、ここでもまた——純実践の根拠から——適応を否定的活動と解する方がよい。」<sup>(3)</sup>ものは考えようというわけである。「実践的根拠から適応も否定的活動である」と言うにいたつては語るにおちたというものだ。統一調和と対立闘争とは互いに他を存立の条件とする点から見て、何れを主、何れを従とも決し難い。だがここはこの問題に深入りすべき場所ではない。われわれは実践を問題にしているのだからエンゲルスの言う通り、対立と闘争を優先させてよい。

唯物弁証法は変革の論理である。論理である以上当然、法則を持たねばならぬ。法則がなければ人が信用せぬ。集まつても来ぬ。

ここで法則とはマルクスとレーニンの理論である。共産主義の社会の経文である。そこではこれを何よりも先ず正しく読みとらねばならぬ。それが完全に出来なければ指導者たる資格はない。スターリンの言つているところによれば、エヌ・ヤ・マールはマルクス主義者であろうとし、努力もした。しかしマルクス主義者にはなれなかつた。何故か。頭がよくなかつたからだ。読み違えたのである。スターリンはこの男の誤りを是正した。それは彼がマルクスを正しく理解する能力を持っていたからである。ところで、不敏なのはマール一人に限らない。教条主義者はみなそうなのである。それらの人人のおかす誤りを直してやるのも終局的にはスターリンでなければならぬ。彼は独裁者なのだから。独裁者の任務はもちろんマルクスの本を読むだけではない。何よりもまず、彼には政治の最高責任者としての任務がある。彼は、ロシア社

会の特殊性の故に、マルクス主義革命理論の定式を外れたコースを経て成立した社会主義国家の現実に即応するために、マルクス主義に修正を加える必要に迫られたことが一再ならずある。もちろん、この修正は単なる主観や恣意によるものであつてはならない。変転きわまりない客観情勢に対する透徹した洞察を前提とした客観性のある修正でなければならぬ。部下を督励して政務上の過誤を防止することも彼の任務でなければならぬ。この方面の過誤は、言語学界における過誤とはわけが違う。人民の生活に至大な影響を及ぼすのだから。その他無限。要するに独裁者は天才でなければならぬ。そしてスターリンは天才であつた。独裁政治の成否は天才の存在を必須の要件とする。

然し、このように、天才の存在を必須の要件とする体制は、「人を得ないとすればどうなるか」という危惧の念から解放されないことも事実である。また、人を得たとしても、その人が至善ならざるが故に、禍いを人に及ぼさないとも限らない。われわれはこの事実をもスターリンにおいて見た。善良にして卓抜な才幹の持主を得て、人民をして依らしめるか、或はその人を得ずして人権と自由を根こそぎにするか——この二つの中の何れかにおちつく体制、このような体制の困つて来たところはどこにあるか。

私はこれを断絶観にあると見る。

第5章から第6章において私の検討したところによれば、弁証法をマルクスとレーニンと毛沢東の主体的弁証法とエンゲルスとスターリンの客観的弁証法として大別することが出来る。ところが、ひとり毛沢東の「実践論」と「矛盾論」を例外として、諸家の理論を通じて言えることは、いずれも、その根底に「飛躍」の思想の流れていることである。<sup>(4)</sup> エンゲルスとスターリンは、自ら「飛躍」を弁証法の法則ないし特徴となしている。レーニンには「飛躍」を基礎づけるような彼自らの理論は見当らない。しかし、彼も「飛躍」から免れているとは言えない。レーニンの「飛躍」は弁証法の原理からというよりは、むしろ実践上の必要から導き出されている。改良主義、日和見主義との戦いに見られる彼の峻厳な中間拒否の論理は断絶観と無縁のものでないが、それは革命実践の障害を排除するための理論的武器以外のものではない。言うまでもなく「飛躍」と「断絶」とは一体不離のものである。「断絶」なくして「飛躍」はあり得ないし、「飛躍」なくして「断絶」は意味をなさない。

唯物弁証法における「飛躍」と「断絶」がヘーゲルの弁証法から来ていることは周知の事実である。マルクスは言う。「弁証法はヘーゲルにおいて逆立ちしている。われわれは神秘の外殻の内に合理の核心を見出すために、この逆立ちした弁証法を更に顛倒せしめねばならぬ。」

このようにしてマルクスによつて創められた唯物弁証法において、この「合理の核心」とはとりもなおさず「否定の否定」「質と量との相互転化」であり、そしてこれらの法則の不可欠の契機をなすものは「飛躍」であつた。しかし、前にもふれたように、マルクスは、ヘーゲルと違い、またエンゲルスとも違つて、これを一般的な法則として取り扱っていない。彼はこれを一つの規準として具体的事物——資本主義の発展過程——にあてはめて、そこにこの法則の作用していることを即物的・経験的に確かめたのである。この意味で、マルクスの弁証法はレーニンや毛沢東のそれとともに主体的弁証法の側にある。しかし、「飛躍」を先天的と見るかどうかは別にして、マルクスが飛躍すなわち断絶観をとっていることは、第2章において明らかにしたところである。「飛躍」が事物の種類によつて異つた相を示すことは、物理現象における「飛躍」が急激なるに対して、社会変革における「飛躍」に時間的な推移の過程があることによつて知られる。しかし、いずれにしても飛躍たることに変りない。ところでこの「飛躍」

を事物の変化、発展における普遍的・絶対的な原則とみなすことが出来るかどうか——これが私の第4章における主要な研究課題の一つであつた。そして私はここで社会事象はもちろん、自然現象においても飛躍の絶対性を否定せざるを得なかつた。

断絶観は単に事物の運動の様態を示すものであるだけでない。それは断絶の相において物を見る一つの世界観でもある。私は第1章と第2章において、マルクス主義者の説において社会主義社会の道徳的状况と資本主義社会のそれとが相互に相容れざる両極として描かれていること、およびこのような絶対的な対立の根底に断絶観の存することを明らかにした。そして、今や、私は断絶観を支えている弁証法の理論的根拠が薄弱であることを見出したと信ずるから、マルクス主義の描く社会主義社会における道徳的状况もそのまま信用することは出来ぬ。社会主義社会ないし共産主義社会の道徳の核心は人間の主体性と自由であつた。私はマルクス主義の倫理学の説く通りに「主体性」と「自由」とが確立するとは思わない。

私は第2章において、マルクス主義の特筆すべき特徴として、それが全人類的な人倫の秩序と自由の獲得とを實踐課題としていること、そしてその実現のプランを提示していることを挙げた。本論文で私の追及したのは専らこのプランの実現の可能性にあつた。社会主義の実施によつて、人間の人間による搾取から、そしてその限りでの自由の喪失から人人が解放されることは問題のないところである。しかし、その種の自由の獲得によつて果して自由に関する課題は終つてしまうのであるか。それを私は問うた。そして、自由の条件が経済的なものに尽きるものでないこと、つまり経済的条件以外に政治・言論の領域における自由の存在することから出発し、この見地に立つて社会主義社会と共産主義社会における自由実現の可能性を追及してみた。

私の試みたところによれば、この意味の自由を見出す道はふさがれている。

私は資本主義社会の道徳的状况と社会主義および共産主義社会のそれとの優劣については一言も触れていない。私は社会主義社会および共産主義社会の道徳的状况が、果してマルクス主義者の描いた通りのものであり得るかを、自由実現の可能性という観点から追及してみようとしただけである。ところで、このような企ては与えられた現実を度外視して純理論的にこれを遂行することはもちろん出来ない。いきおい私はこの問題に関係のあるデータをソヴェト社会主義共和国に求めざるを得なかつた。言うまでもなく、このようなデータは特殊なものであつて、一般的な原則となるものではない。この点には、多少注意を払つたつもりであるが、読みかえてみると特殊を一般化している傾きがないでもない。そこで、この点を是正の意味で、次の一点だけ指摘しておくことにする。それは、スターリン政権下のソヴェト社会における自由のありかは今後のソ連邦や中国のそれはもちろん、今後生じ得べき社会主義国家のありかたを推測する参考資料たる以上に出ることは出来ないということである。

何故に、ソヴェトはマルクスの定式を外れたコースをとつて革命を実現したか——これは古くはない史上の出来事であつて、何人にも周知されている事実であるから、示唆する程度にとどめておいた。ただ一言述べておきたいのは、歴史の教えるところによれば、プロレタリア革命は例外なく資本主義の未熟で後進性の甚だしく、しかも下層社会に対する抑圧の際立つてきびしかつた国々に起きたという事実である。圧縮の度がひどければ爆発の勢いも大きい道理で、いずれもその革命に多かれ少かれに暴力を伴つていた。このことはまた、かかる非常な手段に依る以外に、その国々に活路が閉ざされていたことを物語るものである。

革命によるにせよ、単なる革新によるにせよ、またその他の方法によるにせよ、一国の大衆

が、またすべての民族がそれぞれの運命を自ら開拓し、すべての個人が自己の責任において主体的に事に処して行く体制を作ること、現代道德の根本課題でなければならぬ。そしてかかる体制を作りつつある例をわれわれは中国に見る。そしてまた最近のアジア・アフリカ諸民族の全面的な独立のなかに。これらの諸国や諸民族の解放運動が、その属するところ東西いずれの陣営たるを問わず、あるいは直接に社会主義の潮流に竿さし、あるいは間接にこれを反射して、推進されつつあることは否定出来ない事実である。階級社会の道德的状况と無階級社会のそれとの間に、マルクス主義者の言うほど際立つた断絶はないにせよ、そして体制の変更は急激な変革以外にはあり得ないとする理説が科学的根拠に乏しいにせよ、広義の社会主義の線に副うこと以外に、新しい人倫秩序の実現の期せられないことは争えない事実である。

### 註

#### I

- (1) Zur marxistischen Ethik und sozialistischen Moral. 第二章
- (2) 同上
- (3) 同上
- (4) 同書第三章
- (5) 同書第五章

#### II

- (1) マルクス・エンゲルス、ドイッチェ・イデオロギー、岩波文庫版、66頁
- (2) フォイエルバッハに関するテーゼ、前掲書、32頁
- (3) ドイッチェ・イデオロギー、経済学批判の序説等
- (4) ドイッチェ・イデオロギー
- (5) 同書 85頁
- (6) 同書 85～86頁
- (7) 共産党宣言第一章
- (8) 反デューリング論、マルクス・エンゲルス選集、第14巻、上、260頁
- (9) 共産党宣言、第1章
- (10) 同書 第2章
- (11) 反デューリング論、上 260頁
- (12) 同書 260～261頁
- (13) 同書 231頁
- (14) 同書 202頁
- (15) 同書 203頁
- (16) 共産党宣言、第二章
- (17) 反デューリング論、上、201頁
- (18) Thomas English Hill, Contemporary Ethical Theories, 151頁
- (19) マルクス、ゴータ綱領(草案)批判、第3条の批評より。
- (20) ドイッチェ・イデオロギー 66頁
- (21) エンゲルス、空想より科学へ、岩波文庫版、47頁、
- (22) ドイッチェ・イデオロギー、65頁
- (23) 同書、60頁
- (24) 同書、63頁

25 ドイッチェ・イデオロギー, 65頁

26 反デューリング論, 上 10頁

### III

- (1) フラクチエフ (アレクセイ) 1769~1834, 帝政時代の陸軍大臣。封建的・奴隸的反動の典型と言われる。官僚的・専制的政治の推進者として有名。
- (2) 1918年に創立された「プロレタリア文化協会」で、文化の階級法を一面的に主張し、イデオロギー的セクト主義におちいつて批判を受けた。
- (3) 毛沢東, 矛盾論, 「実践論・矛盾論」, 岩波文庫版, 38頁
- (4) 或る意味での修正の必要はマルクスの存命中に現われた。ドイツにおける労働者の生活の相対的向上に対応する必要があつたからである。しかるにこの現実眼を閉じて、マルクスの教条を墨守することによつて却つてマルクス主義を現実から遠ざけ、その実践性を骨抜きにしたのがカウツキーである。カウツキー一派の教条墨守主義はメンシェヴィーキに尾を引き、やがてトロツキーにまで及ぶのである。そしてメンシェヴィーキとトロツキー派とがそれぞれその対立者たるボルシェヴィーキとスターリンに対する一大勢力をなしていたことは、少くとも純理論的にはマルクス主義がその適用ないし修正に異なつた見解を許すものであつたことを示している。この闘争において、マルクスの精神を活かしてある程度理論をすてたレーニンとスターリンの現実主義が革命を成功させたのであるが、彼等とその対立者との何れがマルクス主義に忠実であつたかを判定することは純理論的には容易でない。
- (5) このことに関連したミコヤンの言葉は下記の通りである。

ヴェ・イ・レーニンは、ソヴェト政府の最高指導者として、平和と、すべての国との外交および通商関係の確立とをうむことなく提案した。

レーニンは、つぎのように語つた。「われわれにとつてなにより貴重なのは、平和の維持である。……」(「全集」, 第32巻, 9頁, 『裁縫労働者全国大会での演説』, 1921年2月6日)。……「われわれはどの国をも除外せず、すべての国との同盟に賛成である……」(「全集」, 第30巻, 341ページ, 「アメリカ新聞『ニューヨーク・イヴニング・ジャーナル』の特派員にたいする答」1920年2月18日邦訳, 国民文庫「平和のための闘争」115頁)。(ソ同盟共産党大会, フルシチョフ報告, ミコヤン演説, 青木文庫 227~228頁)

(6) レーニン選集, 大月書店版, 11巻, 113頁

(7) 良心の自由とは語源的にはあらゆる種類の宗教的な良心の自由を許容すること。詳しくは「ゴータ綱領批判」第四章参照。

(8) スターリン, レーニン主義の諸問題, 真理社版, 161頁

(9) 共産党宣言

### IV

(1) レーニン選集, 1巻, 57頁

(2) レーニン, 哲学ノート, 上, 社会科学研究会編, 233頁

(3) エンゲルス, 自然弁証法, 下, マルクス・エンゲルス選集, 261頁

(4) 自然弁証法, 上, 52頁

(5) 反デューリング論, 上, 270頁

(6) 同書, 242頁

(7) 同書, 242頁

(8) 空想より科学へ, 岩波文庫版, 36~37頁

(9) 反デューリング論, 上, 242頁

(10) 同書, 252頁

- (11) 同書, 265頁
- (12) 同書, 265頁
- (13) 同書, 263頁
- (14) 同書, 267頁
- (15) 同書, 260頁
- (16) 同書, 163頁, この文章はエンゲルスがヘーゲルから引用したものである。
- (17) ルードウィッヒ・フォイエルバッハとドイツ古典哲学の発達。
- (18) 反デューリング論, 上, 271頁, 下線は引用者。
- (19) 同書, 261~262頁。
- (20) 自然弁証法, 上, 52頁。
- (21) 自然弁証法, 上 53頁
- (22) 自然弁証法, 上 52頁
- (23) 例えば, 前述のBのaすなわち「水は正常の気圧の下では……」は *Wissenschaft der Logik* の中の「水温の漸次的変化が突然に中断して新しい状態が出現する……」に当り, また「反デューリング論」のなかでエンゲルスが挙げている例——炭素化合物のなかの一塩基性脂肪酸系 ( $C_nH_{2n}O_2$ ) の  $n$  を  $n=1$ ,  $n=2$ ,  $n=3$  等々とおけば, それぞれ  $CH_3CO_2H$  (蟻酸),  $C_2H_3CO_2H$  (酢酸),  $C_3H_5CO_2H$  (プロピオン酸) となり, 沸点も融点も異なる物質となる。このように諸元素の簡単な量的増大によって, 質的に異なつた諸物体の全系列を見る。——は, 同じくヘーゲルの次の文章の焼直しである。「化学的結合においては, 混合の比例が, 累進的に変化する間にこのような質的結節が起る。……例えば酸素と窒素との結合は種々の酸化窒素および硝酸となる。そして, これらは混合の一定の割合でのみ現われるもので, 本質的に異つた質を持つのである。」このように自然現象に関する場合だけでなく, 社会現象に関してエンゲルスの挙げている例も, その範型はまず全部ヘーゲルにある。その一例。「国家はその大きさの一定尺度を持つもので, この尺度を超えるときは, 同一の政体——これは国家が別の量範囲を所有した際には幸運と鞏固をもたらしした政体なのであるが——の下においても国家は瓦解してしまう。」(G.W.F. Hegel, *Wissenschaft der Logik*, Erster Teil, Erstes Buch, Dritter Abschnitt, Zweites Kapitel, B. Knotenlinie von Maßverhältnissen.) これはエンゲルスの(マルクスを含めての)社会現象における量から質への転化のあらゆる例の範型をなしていることは一見して明瞭である。
- (24) 自然弁証法, 下, 261頁
- (25) 自然弁証法, 上, 52頁
- (26) 反デューリング論, 上, 268頁
- (27) 矛盾論, 40頁
- (28) レーニン, 弁証法に寄す, 「哲学ノート」下, 232頁
- (29) 矛盾論, 59頁
- (30) 同書, 58~59頁
- (31) 同書, 46~47頁
- (32) 同書, 48頁
- (33) 同書, 82—83頁
- (34) 実践論, 14頁
- (35) 同書, 16頁
- (36) 同書, 17~18頁
- (37) 実践論, 22~26頁
- (38) 矛盾論, 49頁

- ③ 同書, 70—73頁
  - ④ 同書, 61—62頁
  - ⑤ 同書, 62—65頁
  - ⑥ 同書, 68頁
  - ⑦ 実践論, 25頁
  - ⑧ 矛盾論, 49頁
  - ⑨ 同書, 49—52頁
  - ⑩ 実践論, 26頁
  - ⑪ 矛盾論, 46頁
  - ⑫ レーニン, 唯物論と経験批判論, レーニン全集, 第14巻, 315頁
  - ⑬ 同書, 312—313頁
  - ⑭ 同書, 岩波文庫版, 附録190頁
  - ⑮ 弁証法に寄す「哲学ノート, 下巻」232頁
  - ⑯ スターリン, 弁証法的唯物論と史的唯物論, 国民文庫版, 98—103頁
  - ⑰ 同書, 101頁
  - ⑱ 同書, 96頁
  - ⑲ 同書, 106頁
  - ⑳ ドイッチェ・イデオロギー, 61—66頁
  - ㉑ 資本論, 1巻, 3篇以下
  - ㉒ 自然弁証法, 上巻, 53—60頁
  - ㉓ 空想より科学へ, 44頁
  - ㉔ 世界観は世界の存在や価値を全体としてとらえ, 巨視的, 包括的に位置づける「物の見方」である。それはすべての事物を個別的に分析し, 観察した結果得られた知識体系というようなものではない。随つて, 世界観は往々にして独断的であり, その表現は宣言的である。スターリンがその典型的な例である。「弁証法的唯物論は, マルクス＝レーニン主義党の世界観である。……形而上学とは反対に, 弁証法は, 発展過程を, 些細な, かくれた量的変化から明白な変化に, 質的变化に移行するような発展, すなわち, 質的变化が急速に, 突然に, ある状態から他の状態に飛躍的移行の形態でおこるような発展と見る。」(唯物弁証法と史的唯物論, 96—100頁) 世界観が世界観の枠内にとどまっている間は, 生活や実践を方向づけるに貴重な役割を果すであろう。しかし(現にスターリンがやつているように)これが科学とされると不確定な原則を事物に押しつけるという非科学的な事態をひきおこす。
  - ㉕ 弁証法的唯物論と史的唯物論, 113頁
- V
- (1) 哲学ノート, 下, 30頁
  - (2) ベルグソン, 創造的進化, 松浦孝治訳, 98—99頁
  - (3) 自然弁証法, 下, 262頁
  - (4) 毛沢東にも飛躍の思想がないわけではない。例えば, 彼が, 感性的知識から理性的知識への移行は飛躍によると言っている場合がこれである。(矛盾論, 20頁)しかしこれは表象内容の質的变化の範囲にとどまつていて, 事物の或る段階から次の段階への移行が飛躍によることとは関係がない。



## *Über die Möglichkeit der Verwirklichung der Freiheit in der sozialistischen und der communistischen Gesellschaft*

Fujio HASHIMA

Diese Frage will ich vom Standpunkt der Ethik aus betrachten. Gewöhnlich steht solch ein Problem außer dem Bereich der Ethik, die es als ihr hauptsächliches Geschäft hat, die allgemeine Theorie über die Wertbestimmung der menschlichen Handlungen, über den Sinn der ethischen Werte und Begriffe, über den Strukturen der Sittengesetze und der Normen und über die prinzipiellen Methode der Verwirklichung der ethischen Werte, kurz, das allgemeine Prinzip der ethischen Grundprobleme aufzustellen. Was ich hier unter dem oben gezeigten Titel untersuchen will, ist dies : die Gültigkeit der neuen ethischen Ordnungen sowie der Mittel für die Verwirklichung derselben, die von Karl Marx, Friedrich Engels und ihren Nachfolgern verfochten worden sind, sachlich zu kritisieren. Folglich mag es nicht das eigentliche Gegenstand der Ethik sein. Nichtsdestoweniger meine ich, soweit handelt es sich um die marxistische Ethik, daß es erlaubt werden kann, diese Frage als einen Gegenstand der Ethik zu behandeln. Und der Grund dafür ist folgender.

Die marxistische Ethik behandelt wenig die Probleme des Prinzips der Ethik mit Ausnahme von der Theorie der Entwicklung der Moralen. Die Marxisten reden nicht selten von den ethischen Ideen z. B. der Gerechtigkeit, der Pflicht und der Ehrlichkeit, von den Sittengesetzen, den sittlichen Warnungen und von der Würdigkeit der Person u.s.w. Aber sie nachfolgen in dem Sinn und der Gebrauchsanweisung solcher Kategorien dem Standpunkt der gewöhnlichen Ethik. Vielmehr ist solche formale Seite ganz außer ihrem Interesse. Was die marxistische Ethik fragt, ist auf den objektiven Bedingungen der Praxis oder der Verwirklichung der oben gesagten Sachen beschränkt. Vor allem besteht das auffallende Merkmal der marxistischen Ethik darin, daß sie den Plan zur Feststellung der menschlichen Subjektivität und Freiheit, die sowohl das Ideal des Menschengeschlechts als auch die Grundbedingung der Moral macht, in Bezug auf sozialen Bedingungen stellen und die Mittel der Praxis, die für seine Ausführung gewählt werden müssen, konkret schildern. Folglich soweit wir die marxistische Ethik behandeln, können wir nichts anders fragen als die Ausführbarkeit ihres Plans, d. h. die Möglichkeit der Verwirklichung der Freiheit.

Das gewöhnliche Mittel, das von Karl Marx und seinen Nachfolgern gebraucht ist, wenn sie die sittliche Lage in der sozialistischen Gesellschaft schildern, ist es, daß sie dieselbe in bezug auf den sittlichen Verhältnissen in der kapitalistischen Gesellschaft bezeichnen. Die sittlichen Lagen beider Gesellschaften werden als die

absolut unversöhnbar gegenüberstehende Pole geschildert. Natürlich die erstere als die die Freiheit und Subjektivität der Menschen versichernde, humanistische Moral; die letztere als die die Menschheit vernichtende Sklavenmoral. Die erstere als die die unendliche Aussicht habende, zukünftige Moral; die letztere als die zugrunde gehende, veraltete Moral.

In dem Grund solcher „Abbruchsanschauung“, die die sittlichen Lagen beider Gesellschaften als „These und Antithese“ gegeneinander stellt, liegt selbstverständlich die Dialektik. Folglich, um die Fragen der Verwirklichung der Freiheit in der sozialistischen Gesellschaft zu betrachten, die den Kern der marxistischen Ethik macht, müssen wir unverweigerlich die Dialektik beobachten.

In dieser Schrift werde ich erstens „Zum marxistischen Ethik und sozialistischen Moral“ von Hans Boeck als ein Exemplar der marxistischen Ethik aufnehmen und das allgemeine Merkmal derselben klar machen und zweitens mich die ethische Anschauung von Marx und Engels kurz fassen und erörtern, daß in ihrem Grund die „Abbruchsanschauung“ vorhanden ist, und drittens die Fragepunkte der Dialektik klar machen und viertens die „Abbruchsanschauung“, die sich auf diese Fragepunkte beziehen, kritisch betrachten und letztens das Problem der „Möglichkeit“ in Zusammenhang mit dieser „Abbruchsanschauung“ kritisieren.